

豊中市
新免古墳群第3号墳

—新免遺跡第38次調査—

1993年

六甲山麓遺跡調査会

豊中市
新免古墳群第3号墳

—新免遺跡第38次調査—

1993年

六甲山麓遺跡調査会

卷頭図版



円筒埴輪 土師質(左)と須恵質(右)

序

阪急豊中駅東口前は、阪神間でもっとも早く橋上広場と下のバス・ターミナルが設置された記憶がある。今はあちらこちらに見られる風景だが、限られた駅前空間の立体的利用のはしりであった。この広場の右端の階段を国道へ降りて、右手へ少し行くと、銀行と証券会社のビルの間にはさまれたビルがある。北西から南東に走る国道に北から交わる道がつきあたった正面にあり、「1992年定礎」と記す標板が入口にはめこまれた6階建の貸ビルである。新免第3号墳の墳丘の中心部と周濠の一部がこの位置にあった。前に立って三方向の道路をみわたすと、ゆるやかな傾斜があり、台地面に位置することをかろうじて知りうる。裏にあたる西方をうかがうと、一段と低くなっていることにもすぐ気づく。しかし一帯のビルと家屋群、さらに舗装路面からは、かつての丘陵面をしのぶ手がかりは失われた。まして、この一帯が大規模な新免遺跡であることは、ほとんど知られていないだろう。ときにこのような工事にともなう発掘調査によって、一瞬陽の目をみた遺構は、多くの場合、つぎの瞬間に永久に消滅してしまう。私たちの調査に大きな責任を伴う所以である。

墳丘の盛土（封土ともいう）がまったく削平されたこの円墳は、周濠に落込んでいた多数の埴輪および出土遺物から、6世紀前半の古墳と判定できた。古墳そのものの形状へのかぎりは、ほとんど失われていたが、埴輪については、貴重な資料が多く得られた。円筒埴輪、そして形象埴輪——人物埴輪、家形埴輪、蓋（きぬがさ）形埴輪、かつて消火器形埴輪ともいわれた大火形埴輪、盾（たて）形埴輪など——についての検討、さらに被葬者についての考察は、ほとんど新知見である。

このたびの調査では、幸いにもすでに隣接地で豊中市教育委員会が実施された発掘調査の資料をあらかじめ利用させていただけたので、前回の疑問点の解決もふくめて課題とすることができた。遺構の残存状況はほぼ予想通りであったが、さすがに濠内に堆積する埴輪片をみたときには感激した。本来ならば、現地説明会を開いて地元の方々、多くの市民に現場を公開したかったのだが、交通渋滞のおそれなどから断念した。機会あれば、この報告書はもとより出土遺物や作成したスライドから、この古墳および周辺の遺跡について知っていただきたい。

発掘調査は順調に完了し、ここに報告書をまとめることができた。あらためて関係者各位に深謝するとともに、今後とも豊中市における文化財保護行政の進展に期待したい。

1993年5月

六甲山麓遺跡調査会
代表 橋本 久

凡　　例

1. 本報告は六甲山麓遺跡調査会が、株式会社アステックの委託を受けて実施した大阪府豊中市に所在する新免遺跡第38次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は橋本 久を調査団長に、浅岡俊夫を調査主任とし、1991年4月16日から5月29日まで実施した。
3. 調査に際して、豊中市教育委員会社会教育課の奥田至藏・柳本照男・服部聰志各氏から指導・助言を得た。また、施主・藤和興産有限会社、株式会社アステック、太平工業株式会社大阪支店の関係者各位から種々協力を賜った。
4. 遺構の空撮・空測図化は、写測エンジニアリング株式会社が行った。
5. 本報告を作成するにあたって、出土遺物のうち土器類・埴輪については姫路真保・古川久雄・西田明子・磯辺敦子・谷口美恵子・萩原美香、浅岡俊夫が測図し、古川が製図した。石器類については橋本正幸氏が測図・製図した。
6. 遺構の写真撮影は浅岡が行い、遺物の写真撮影は楠本真紀子氏に依頼した。
7. 本報告の編集、本文の執筆は、橋本久と古川の協力のもとに浅岡が行った。
8. 遺物のうち、実測図になく、写真に掲載したものは200番台の番号を付した。
9. 発掘調査の実測図・写真および遺物は一般に供するよう豊中市教育委員会に移管している。広く利用されることを希望する。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経過	7
1. 調査に至る経過	7
2. 発掘調査組織	8
3. 調査経過（日誌抄）	8
III 調査の方法	10
IV 検出遺構	10
1. 土層	10
2. 遺構	13
(1) 中・近世の耕作痕と溝状遺構	13
(2) 「レール状遺構」	14
(3) 古墳（周濠）跡	14
V 出土遺物	20
1. 須恵器	20
2. 増輪	24
(1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪	24
(2) 家形埴輪	27
(3) 人物埴輪	28
(4) 蓋形埴輪	29
(5) 大刀形埴輪	31
(6) 盾形埴輪	33
(7) 石見型埴輪	34
(8) 蛇つき埴輪	34
(9) その他の形象埴輪	35
VI まとめ	53
1. 古墳の形態と規模	53
2. 築造時期と被葬者について	53
3. 増輪にみる「赤」と「白」	56

図・表目次

図1 豊中台地周辺の地形	2	図17 円筒埴輪(4)	39
図2 遺跡の位置と周辺の遺跡	3	図18 円筒埴輪(5)	40
図3 調査風景	5	図19 家形埴輪	41
図4 新免古墳群分布図	6	図20 人物埴輪・後頭部復元図(A)	42
図5 占墳周塚内上層断面図	11	図21 人物埴輪正面復元図(B)	43
図6 周塚内 a 層出土の石器	12	図22 蓋形埴輪(1)	44
図7 古墳周塚内 a~d 層出土の土器類	12	図23 蓋形埴輪(2)	45
図8 「レール状遺構」のつなぎ目	13	図24 大刀形埴輪(1)	46
図9 造構検出平面図	15~16	図25 大刀形埴輪(2)	47
図10 第30次・38次調査 第3号墳 平面関係図	17~18	図26 大刀形埴輪(3)	48
図11 須恵器	22	図27 鰐つき埴輪	49
図12 須恵器甕腹拓影	23	図28 盾形埴輪	50
図13 野崎古墳群第4号墳の家形埴輪	27	図29 石見型埴輪・鰐つき埴輪	51
図14 朝顔形埴輪(1)	36	図30 鰐つき埴輪・その他の形象埴輪	52
図15 朝顔形埴輪・円筒埴輪(2)	37	図31 蓋形埴輪の立飾り形態変遷図	55
図16 円筒埴輪(3)	38	表1 周辺の遺跡地名表	2

付図 新免古墳群第3号墳(新免遺跡第38次調査)空測平面図

図版目次

卷頭図版	円筒埴輪 土師質（左）と 須恵質（右）	図版12	（上）土師質土器・瓦質土器・須恵器・ 陶器類 （下右）須恵器大鉢
図版1	遺跡周辺航空写真		（下左）石器
図版2	調査区全景垂直写真		
図版3	（上）発掘調査状況と周辺の概況 （下）発掘調査全景	図版13	須恵器
図版4	（上）耕作痕・SD-1等の遺構検出 状況（北より） （下）同上（西より）	図版14	円筒埴輪（土師質・須恵質）
図版5	（上）周濠内埴輪検出状況（北より） （下）完掘後周濠の状況（北より）	図版15	円筒埴輪（土師質）
図版6	（上）A・B地区周濠内地輪検出状況 （下）周濠内「レール状遺構」	図版16	（上）円筒埴輪（土師質） （下）円筒埴輪（須恵質）
図版7	（上）周濠内A断面（A'-A） （下）周濠内B断面（B'-B'）	図版17	朝顔形埴輪
図版8	（上）周濠内C断面（C-C'） （下）北壁断面（C断面 C-C'）	図版18	（上）朝顔形埴輪 （下）蓋形埴輪（立飾り）
図版9	（上）「レール状遺構」につぶされた 埴輪の検出状況 （下）C地区埴輪検出状況	図版19	蓋形埴輪
図版10	（上）C地区蓋形埴輪等検出状況 （下）B地区石見型埴輪・蓋形埴輪・ 人物埴輪「ミズラ」等出土状況	図版20	（上）人物埴輪（須恵質） （下）人物埴輪（土師質）・その他の形 象埴輪
図版11	（上）B地区大刀形埴輪出土状況 （下）B地区家形埴輪・須恵器等出土 状況	図版21	大刀形埴輪
		図版22	（上）家形埴輪（土師質） （下）家形埴輪（須恵質）
		図版23	（上）家形埴輪（土師質）・その他の形 象埴輪 （下）盾形埴輪・その他の形象埴輪
		図版24	（上）盾形埴輪・石見型埴輪 （下）穿孔のある埴輪
		図版25	鍔つき埴輪

I 遺跡の位置と環境

新免遺跡第38次調査地点は、豊中市本町1丁目51-3・56-1の地番を有し、阪急豊中駅前の一帯に位置する。豊中は、大阪の衛星都市として、また空からの玄関口として発展してきた町で、近年、駅前再開発を推し進める中で大きく変貌しようとしている。なだらかな丘陵の中に自然とよく調和した住宅地としての昔の面影は、もう過去のものとして失われつつある。

豊中の地勢は、万葉集にも詠われた島熊山を頂点として形成された丘陵地帯と、猪名川によって育まれた平野部とからなっている。猪名川に面した丘陵地帯は千里川をはさんで、待兼山・刀根山丘陵と豊中台地とに分かれる。縁辺の比高差が10~15mという低くてなだらかな稜線がのびる豊中台地は、等高線が密にこむ中位段丘と希薄な低位段丘とからなり、生活に適した立地条件を備えている。

こうした豊中台地特有の地形をうまく利用し、使い分けて我々の祖先は足跡を刻みつけてきた。今確認されている遺跡の分布をみてみると、低位段丘面には新免遺跡・本町遺跡・山ノ上遺跡・岡町北遺跡のような弥生時代から中世にかけての集落遺跡が集中するのに対し、中位段丘面では縄文時代の遺跡はみられるものの、弥生時代以降の集落遺跡は見つかっておらず、古墳時代前期から中期の桜塚古墳群や白鳳時代の金寺山廃寺など、記念物的な遺構が散在する程度である。稻作農耕が取り入れられ、狩猟・採集経済から農業経済に移行した弥生時代以後、土地利用がある程度厳密に選定された結果とみることができよう。

しかしながら古墳時代後期になると、本来、集落の立地範囲であるべきところにも奥津城が拡大され、新免遺跡の中に後期古墳が造られていたことが40次におよぶ発掘調査で明らかになってきた。東西850m、南北550mの広大な面積を有する新免遺跡は、縄文時代の遺構・遺物も確認され、縄文時代から継々と営まれてきた遺跡であり、市内でも屈指の規模をもつ弥生時代の集落として、そして古墳時代後期には桜井谷古窯跡群で焼かれた須恵器の集積・選別・集荷にかかる機能をもった集落として注目されている。古墳は、復元全長23mの帆立貝形前方後円墳（2号墳）1基をふくむ5基が集落跡の東はずれに営まれている。不明の1基をのぞいてのこり3基は直径13~18mの円墳と思われ、出土した埴輪・須恵器から6世紀前半に築かれたものと考えられている。これらの古墳の築造時期は、6世紀になって桜井谷で須恵器生産が始まった年代と一致しており、その被葬者はそこで焼かれた須恵器の流通に携わった関係者に由来するものと考えられる。

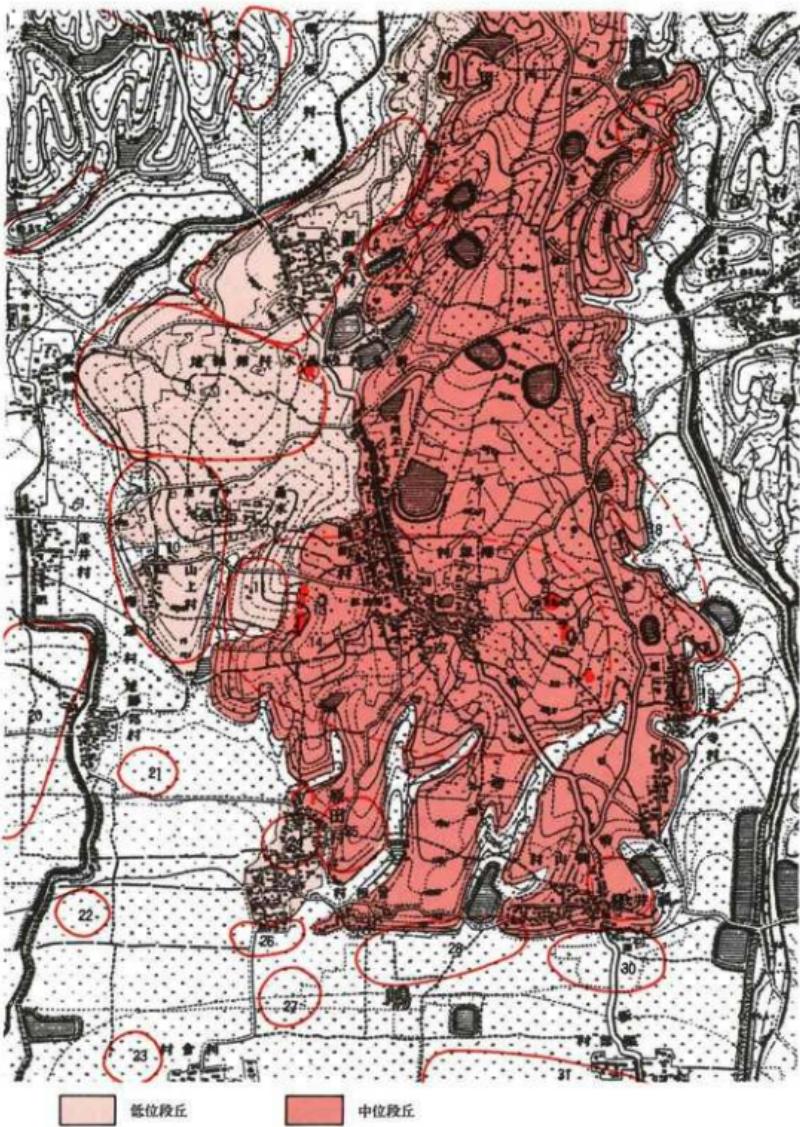


図1 豊中台地周辺の地形 (明治18年陸測図 1/20,000)

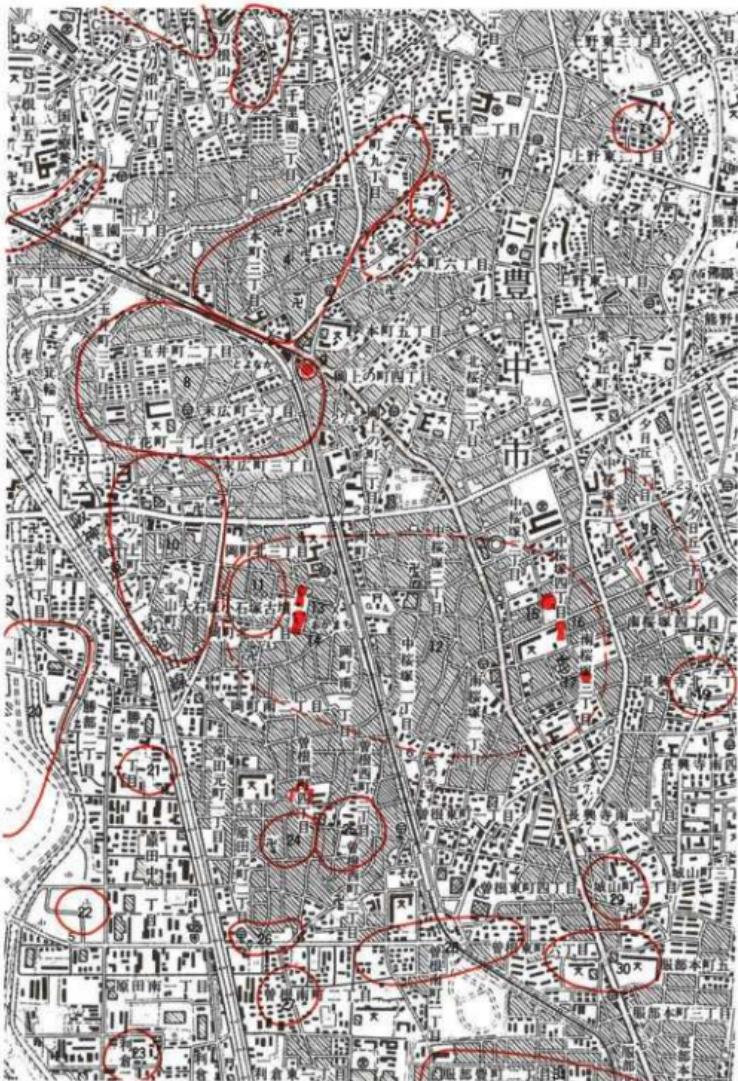


図2 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000「伊丹」を1/20,000に拡大)

表1 周辺の遺跡地名表

(番号は図2に一致)

番号	遺跡名	種類	内 容	時代	文 獻
1	持兼山遺跡	墳・古墳	高地性集落、古墳群	弥生～近世	
2	柴原遺跡	集 落	ナイフ形石器	旧石器～奈良	⑬
3	南刀根山遺跡	集 落	壺棺	弥生後期	
4	木町遺跡	集 落	豎穴住居跡 挖立柱建物跡	弥生～平安	⑭⑮⑯
5	新免宮山古墳群	古墳群	横穴式石室墳・陶棺	古墳後期	
6	金寺山廃寺	寺院跡	軒丸瓦・軒平瓦 塔心礎	白鳳～奈良	①
7	上野遺跡			縄文	
8	新免遺跡	集 落	豎穴住居跡 方形周溝墓 古墳跡	縄文～中世	⑩⑪⑫⑬⑭⑯
9	新免古墳群第3号墳	古 墳	円墳か 形象埴輪	古墳後期	本報告
10	山ノ上遺跡	集 落	豎穴住居跡 挖立柱建物跡 寺院跡	弥生～中世	⑩⑪⑬
11	調町北遺跡	集 落	豎穴住居跡 挖立柱建物跡	弥生中期～	⑬
12	桜塚古墳群	古墳群	もと36基存在したといわれる	古墳前・中期	
13	小石塚古墳	古 墳	前方後円墳 全長49m	古墳前期	④⑤⑥
14	大石塚古墳	古 墳	前方後円墳 全長87m	古墳前期	④⑤
15	大塚古墳	古 墳	円墳 直径56m	古墳中期	⑩⑪
16	御動子塚古墳	古 墳	前方後円墳 全長55m	古墳中期	⑬
17	南天平塚古墳	古 墳	帆立貝式古墳 全長28m	古墳中期	⑫
18	下原席跡群	席 跡			
19	長興寺遺跡				
20	勝部遺跡	集 落	木棺墓 寶棺墓 挖立柱建物跡	弥生～平安	⑬
21	勝部東遺跡				
22	原田中町遺跡				
23	利倉北遺跡				
24	原田遺跡	集 落			
25	曾根遺跡	集 落	豎穴住居跡	弥生後期	
26	原田元町遺跡				
27	曾根南遺跡				
28	豊島北遺跡				
29	城山遺跡				
30	服部遺跡	集 落	上墳 井戸	弥生 中世	⑦
31	穂積遺跡	集 落	円形占墳群	縄文～	

主要文献

- ①石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936
- ②小林行雄「大阪府豊中南天塚の発掘」『考古学』8-9 1937
- ③豊中市教育委員会『勝部遺跡』1972
- ④豊中市教育委員会『史跡大石塚・小石塚—保存事業に伴う調査報告一』1980
- ⑤大阪大学待兼山遺跡発掘調査団『待兼山遺跡』1984
- ⑥大阪大学埋蔵文化財調査委員会『待兼山遺跡II』1988
- ⑦服部遺跡発掘調査団『服部遺跡発掘調査報告書』1986
- ⑧豊中市教育委員会『新免遺跡・第11次発掘調査報告書』1987
- ⑨豊中市教育委員会『摂津豊中大塚古墳』1987
- ⑩豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1982年度
- ⑪豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1983年度
- ⑫豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1984年度
- ⑬豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1985年度
- ⑭豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1986年度
- ⑮豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1987年度
- ⑯豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1988年度
- ⑰豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1990年度
- ⑱豊中市教育委員会『新免古墳群の調査概要』『大阪府下埋蔵文化財研究会(第25回)資料』1992
- ⑲浅岡俊夫『豊中市岡町北遺跡—第3次調査—』六甲山麓遺跡調査会 1993



図3 調査風景

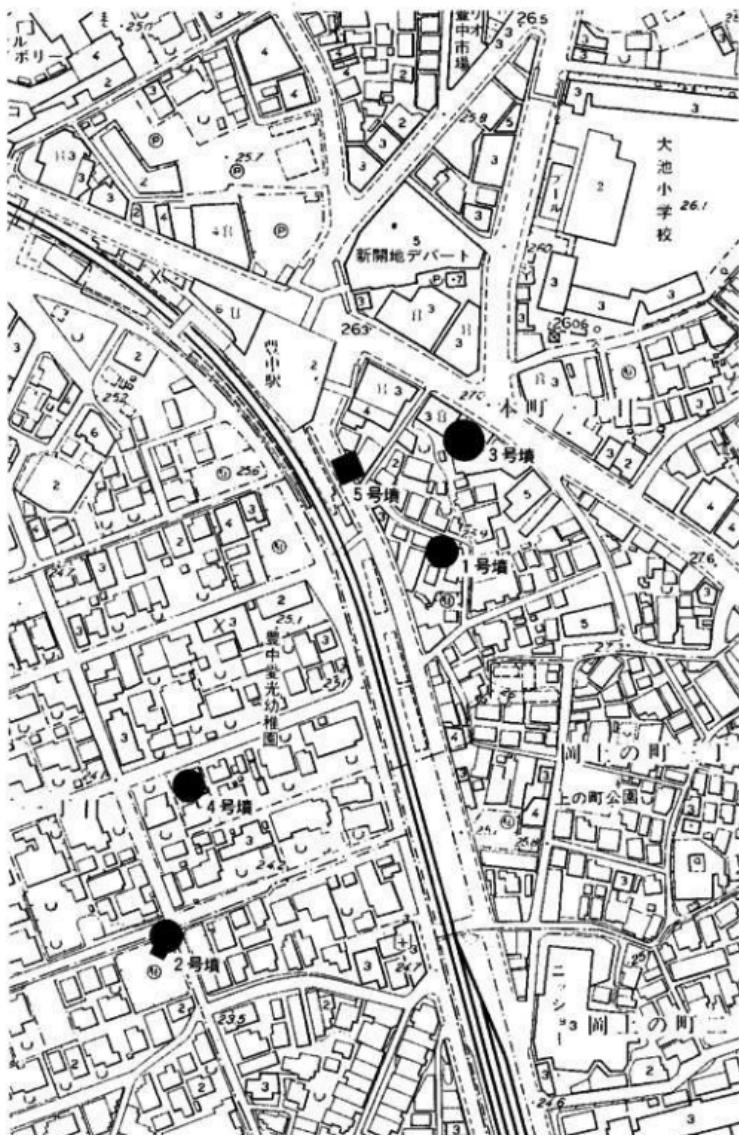


図4 新免古墳群分布図 (1/2,500)

II 調査の経過

1. 調査に至る経過

当該地は阪急豊中駅から東へ70m、国道176号線に面した市街地の中心に位置する。周辺には銀行・証券会社などの金融機関が立ち並び、市の中心的位置を占める場所である。この一等地にテナントビル建設が地元の藤和興産有限会社によって計画され、埋蔵文化財の取り扱いを市教育委員会と協議されたところ、新免遺跡第30次調査がすぐ南隣において行われており、埋没古墳の一部が発掘されていて、その古墳が当該地にもおよんでいることが説かれたのである。しかし、市教育委員会の調査は1年以上も先になるということで、開発に支障を來す状況のもと、株式会社アステックを通じて当調査会に発掘調査の依頼がなされた。

これを受けて調査会の浅岡は、市教育委員会社会教育課に赴き、遺跡の内容を聞き、資料の提供を受けた。この遺跡は、新免遺跡の三十数次にわたる調査で、後期古墳が5基検出されている（図4）うちの第3号墳にあたる。十数m級の古墳であり、すでに墳丘は削平をうけているものの、周濠からは大量の埴輪や須恵器が出土している。埴輪には円筒埴輪のほかに家・大刀・人物などの形象埴輪が含まれる6世紀前半の古墳である、などの知見を得た。こうした内容をもとに種々検討したうえで、調査を受けることにした。そして、市教育委員会と事業主側と調査会の三者による協議の結果、1991年4月15日から調査に入ることとし、文化財保護法第57条第1項の規定により、埋蔵文化財発掘調査届出書を3月14日に市教育委員会に提出するとともに、遺物の帰属などを定めた三者間の覚書をかわした。調査契約は、㈱アステックと当調査会との間で締結した。

当該地の敷地は東西約19m・南北約16mの不正台形をした土地で、面積約210m²のうち建物建設の影響を受ける173m²を発掘調査するため、土砂は全て場外へ搬出しなければならず、国道の交通量はもとより当該地が三叉路に面したことによって、土砂の搬出には人一倍を使わなければならないハンディを背負った調査であった。こうした中、雨の多い年でもあり、事業主側の調査に入れる体制が予定日に整わず、1日遅れの4月16日から調査に取りかかれることとなった。

調査には藤和興産㈱をはじめとし、㈱アステック、太平工業株式会社の全面的な協力を受け、大きな成果のうちに5月末日をもって現場作業を終了し、6月3日に現地を引き払った。協力を受けたそれぞれの担当者の方々に謝意を表したい。

2. 発掘調査組織

発掘調査と整理作業参加者はつぎのとおりである。

調査団長	橋本 久
調査主任	浅岡俊夫
調査員	姫路真保・谷口美恵子・西田明子・磯辺敦子 古川久雄 一整理作業一
補助員	萩原美香
	重川一代・岸川茂美・前田はるみ・藤井民子 一整理作業一
石器整理	橋本正幸
遺物写真撮影	楠木真紀子
事務担当	八木明美・中棚美佳
作業員	安西工業株式会社
航空写真撮影	写測エンジニアリング株式会社

発掘調査および整理作業中につぎの方々から遺跡・遺物についてご指導、ご助言、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する。(五十音順)

伊井孝雄(日本考古学協会)、上原真人(奈良国立文化財研究所)、萬野 豊(兵庫県立尼崎南高校)、小林謙一(奈良国立文化財研究所)、須藤 宏(神戸市教育委員会)、高橋克壽(京都大学)、辰巳和弘(同志社大学)、田辺昭三(京都造形芸術大学)、中島正善(浪速高校)、中村五郎(福島県文化財審議委員)、中村信義(新日本製鉄)、服部聰志(豊中市教育委員会)、福岡澄男(大阪文化財センター)、宮川横一(辰馬考古資料館)、宮本長二郎(文化庁)、宮木 博(兵庫県立図書館)、村川行弘(大阪経済法科大学)、村上富貴子(大阪文化財センター)、森田克行(高槻市立埋蔵文化財センター)、柳本照男(豊中市教育委員会)、山元 建(元豊中市教育委員会)、和田晴吾(立命館大学)

3. 調査経過(日誌抄)

4月16~19日 発掘調査開始。盛土・IH耕土(1~3層)を機械掘削し、土砂搬出。

4層(床土)を発掘し、その直下から地山面を確認。地山面から耕作痕、溝状遺構(SD-1)、古墳周濠跡などを検出。耕作痕およびSD-1は中世頃のもので、古墳はすでに完全に削平され、封土や主体部の痕跡もとどめてい

- ないことが判明。古墳周濠跡は東側部分を検出。
- 20~22日 古墳周濠部に土層観察のための畦を2本設定し、周濠内を三区分し、南から北へA・B・C区とする。国家座標に合わせて、発掘調査区を5m方眼に区割りする。
北・西壁土層断面実測開始。平板測量(1/100)。
- 23日 市教育委員会柳本照男氏現地立会。
- 23~30日 周濠内堆積土a~d層を発掘。須恵器・埴輪・中世遺物・石器が少量出土する。周濠内も中世に4段階にわたって耕作を受けたことが判明。
南壁土層断面図実測開始。平板測量(1/50)を行い、遺物出土地点を記入。
- 5月1~10日 周濠底に攪乱をうけない堆積土層(e層)を検出し、発掘する。A区からB区にかけて周濠底から1.5mの間隔で2本平行にはしる「レール状遺構」を検出するとともに、散乱埋没した埴輪を検出。B区からC区にかけて埴輪の一群を検出。
遺物出土状況、周濠内畦断面写真撮影。
- 畦の土層断面実測後、畦2本を除去。
中世の耕作痕、SD-1などを発掘。
- 11~19日 耕作痕、SD-1など写真撮影および平面・断面実測。
「レール状遺構」および埴輪出土状況部分の写真撮影。
調査区全面清掃。
- 20日 バルーンによる空撮。市教育委員会柳本氏立会。
- 23~29日 調査区全景・周濠全景・遺物出土状況全景等写真撮影後、遺物出土状況平面実測。
東壁部B区からC区にかけて20~30cm拡張し、埴輪の埋没状況を確認。その結果、遺物は拡張区から若干量出土したもの、当初、発掘した範囲内から大きくなみ出て散布することなく、外へはさほど広がらないことが判明。また、「レール状遺構」の1本は、接続部分が検出されたことにより、般のあとではないことも判明。
周濠の北壁断面の断ち割りトレンチを設定。
遺構・土層断面・遺物出土状況の実測完了。
遺物取り上げ後、完掘状況写真撮影。
- 27日 市教育委員会服部聰志氏立会。
- 5月30日~6月3日 図面点検、遺物洗浄。遺物・機材撤去。

III 調査の方法

調査地は、国道176号線に面した間口の長さが16.5mの三角形に近い不正台形をした土地で、面積は210.6m²をはかる。発掘調査は建物の影響を受ける範囲を対象とし、約173m²を発掘した。

調査にあたって、調査範囲内を国家座標（第6系）にしたがって5m方眼に割付け、北西隅から東西にA・B・C…、南北に1・2・3…の記号・番号を付した。ちなみに、A-1=X-134,775・Y-48,880、E-3=X-134,785・Y-49,860となる。

調査は盛土・擾乱土・旧耕土を機械掘削し、4層（床土）以下を人力により精査した。残土は全て、そのつど場外へ搬出処理した。

IV 検出遺構

1. 土層（図5）

調査地全域が古墳跡地に包括されているものの、墳丘はすでに削平され、墳丘の盛土は失われていた。墳丘部分は地山が露呈し、周濠がかろうじて残っている状況であった。そこで、土層の堆積状況を周濠内とそれより上層に分けて記述する。周濠内堆積土層より上の土層については1～4層、周濠内の土層についてはa～e層、地山を5～9層として表示する。

- 1層 摆乱土・盛土層。地表下70cm前後の厚さをはかる。盛土敷地ののち、建築物のため大きく擾乱を受け、下層に薄くしかも部分的に盛土を認める程度である。
- 2・3層 いずれも10～15cmの厚さをもつ旧耕土層である。土質は灰色系の粘質砂泥。
- 4層 関黄灰色粘質砂泥層で、調査地一面に認められる。3層耕土の土壌として入れられたものであろう。近世の陶磁器に混じって中国製の青磁・白磁の破片が数点見られる。4層以下の墳丘部分が地山となる。
- 地山 地山の最上部を形成するのが5層・黄灰褐色シルト層である。その下に6層・灰色シルト層、7層・茶灰色砂層（礫少量混）がほぼ水平に堆積する。この5・6・7層に割り込む形で8層・灰色砂礫層が30cmほどの厚さで認められ、周濠の底に露呈する。その下に9層・明赤褐色礫混粗砂層が顔をのぞかせる。

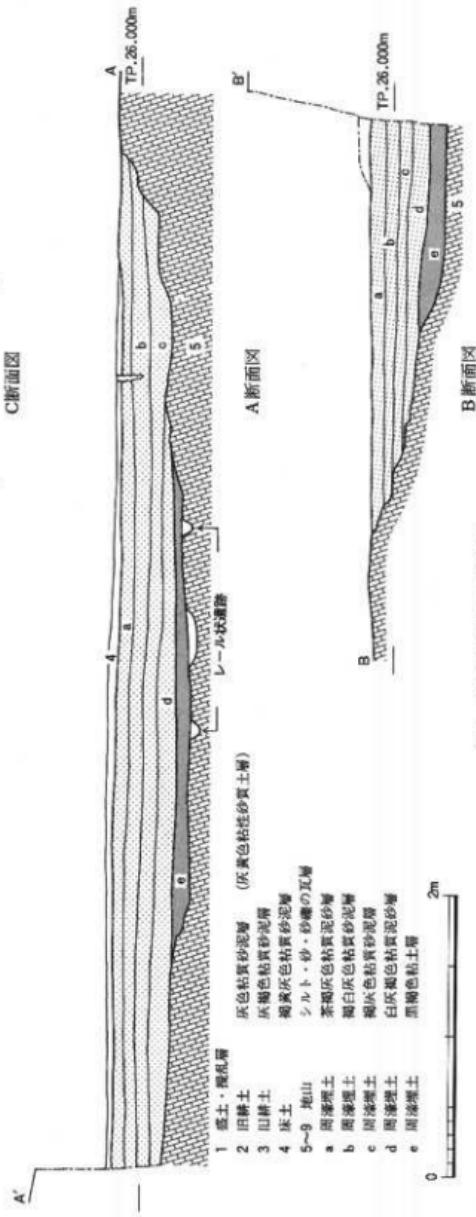
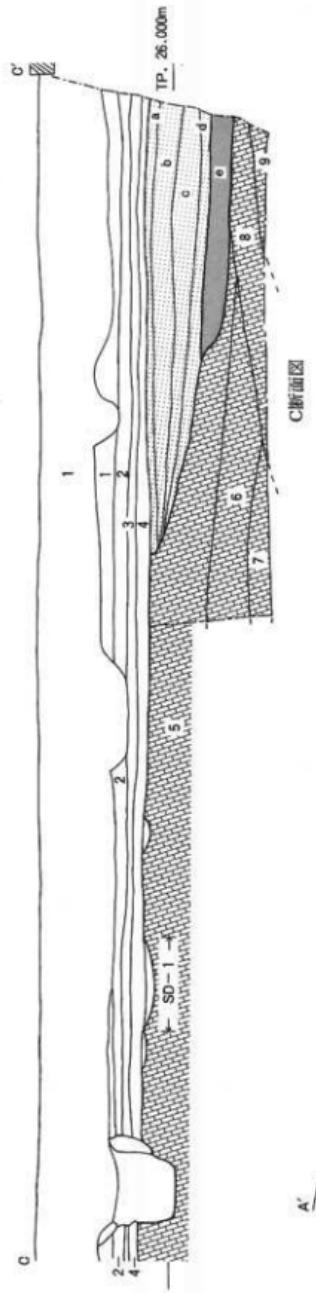


図5 古墳周辺内土層断面図

a層 周濠最上部に5cmほどに薄く堆積する茶褐色灰色粘質泥砂である。古墳に関係したと思われる須恵器・地輪のほかに土師質土器皿（図7-2）・土師質三足鍋の脚（5）や白磁などがみられる。中世木頭の耕作土と思われる。

なお、サヌカイト製スクレーバーが1点（図6-1）検出された。横長削片から作られた直刃形態のサイドスクレーバーで、全体に磨耗し、剥離稜線はほとんど見えない。長さ28mm、幅56.7mm、厚さ12.1mmをはかる。

b層 15cmほどの厚みをもつ褐白灰色粘質砂泥で、土師質土器皿（4）・須恵器捏鉢（10）・瓦器・瓦質三足鍋の脚（6・7）・中世陶器の甕（9）などが出土している。15世紀後半頃と考えられる。

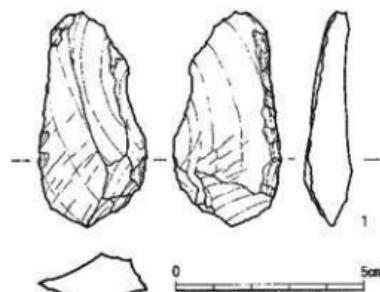


図6 周濠内a層出土の石器

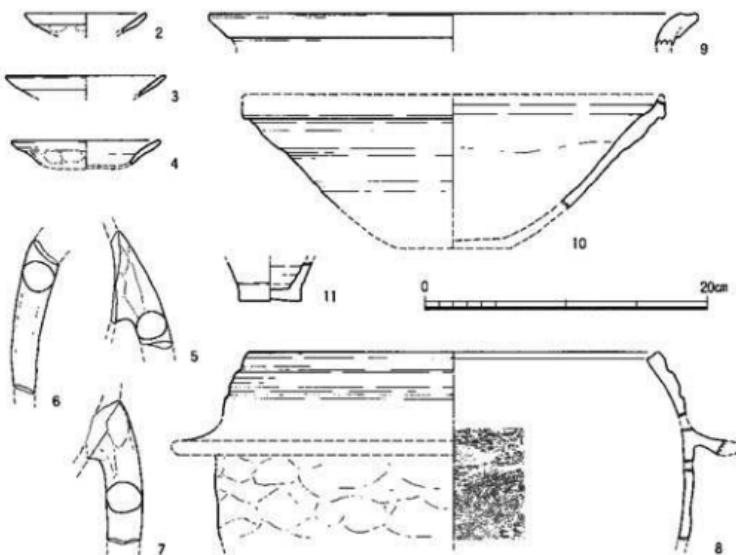


図7 古墳周濠内a～d層出土の土器類

- c層 b層と同じく厚く堆積する褐灰色粘質砂泥である。遺物の内容等は上層と同じで、土師質土器皿（3）などから15世紀代の上層であろう。
- d層 約10cmの厚さで堆積する白灰褐色粘質泥砂である。a層からd層までの間、幅1.5mから2mにわたって墳丘基底部が侵食を受けたような跡が、古墳の円周に沿って認められた。それは軽く段差をもって幾重にもめぐっており、明らかに犁でもって削り取られていった過程が窺えるものである。おそらく古墳の周濠を利用して耕作がなされた結果とみうけられ、a-d層は耕作の過程の堆積層と考えられる。出土遺物は須恵器や埴輪にまじって、瓦質羽釜（8）や須恵器鉢（11）などがみられる。
- e層 周濠の最下部に認められる黒褐色粘土で、上部が黒く、下部が白味を帯びた淡い色を呈する。埴輪が転落した状態で多量に出土した。d層より上が後世の擾乱を受けているのに対し、この層は古墳に関係する遺物をそのまま包蔵する土層である。

2. 遺構（図9・10）

豊中市教育委員会の新免遺跡第30次発掘調査により、南隣の敷地から古墳の一部が発掘された。その古墳の復元直径は18mをはかり、古墳の中心部を含めて古墳の東側が当該地にかかるであろうことが判明していた。

調査の結果、古墳の封土はまったく失われ、墳丘部分は地山が露呈し、石室など主体部の痕跡すら残らないまでに削平を受けていた。さいわい古墳の周濠の輪郭は第30次調査で検出された延長線上で確認できた。

検出した主な遺構は、(1) 中・近世の耕作痕と溝状遺構、(2) 丸太を2列に敷いたと思われる「レール状遺構」、(3) 古墳（周濠）跡である。

つぎにそれらの遺構の概要を記す。

(1) 中・近世の耕作痕と溝状遺構

封土を失って地山が露呈した古墳跡から、南北方向に走る犁による耕作痕と偶蹄類と思われる足跡を確認した。同時に耕作痕に直行する溝状遺構（SD-1）を調査区の北隅から検出した。SD-1は幅約40cm・深さ5~10cmをはかり、N70°Eの方向・東北東から西南西に伸びている。遺物は、耕作痕やSD-1から埴輪・須恵器に混じって少量の瓦器片やV期に比定される備前焼檻鉢の細片1点が出上している。いつの時点で墳丘が削り取られ古墳跡が田畠に利用されたのか詳らかではないが、耕作痕やSD-1から近世の陶磁器などはみられず、その上層の4層には近世の陶磁器が含まれていることから、近世以前すでに古墳は削平され、田畠に開墾されていたものと思われる。

周濠内の耕作については、周濠がある程度埋まった段階で始まり、その段階ではまだ封土は削られることなく古墳は存在していたのであろう。古墳を少しずつ侵食していった耕作痕が幾重にも認められるのである。侵食の過程は少ないところで3段、多いところで6段の犁痕が同心円状に見られ、古墳は周濠基底部から1.3mないし2mにわたって侵食を受けていた。耕作による侵食が繰り返し行われる中で、周濠が50~60cm埋まった段階に達したとき、古墳が破壊され、耕作地の拡大がなされたものと思われる。その結果が、前述した古墳跡における耕作痕である。

(2) 「レール状遺構」

周濠の底から、ほぼ古墳に沿って円弧状に走る2本の平行した幅10~15cmの溝状遺構を検出した。2本の溝状遺構の間隔は1.5mあり、30次調査で検出された同様の遺構につながっている。この溝は本調査では調査区外に伸びており、その始まりは不明であるが、30次調査区では古墳の周濠から抜け出す辺りで途絶えているようである。

この溝状遺構は幅10~15cm・深さ6~7cmほどで、その形状は丸みを持っており、一部で周濠に転げ落ちた埴輪や須恵器を押しつぶした跡が認められた。また、調査終了時に国道176号線側の壁際を少しえぐってみたところ、図8のように溝状遺構の片方が10cmほどとぎれて、少し食い違った状態でさらに外側につながっていく様子が見てとれた。おそらく2本の棒状のものの繋ぎ目跡であろう。こうした所見から2本の溝状遺構は、人为的に掘られたものではなく、また車の轍の跡とも考えにくく、丸太を2本平行に並べたうえを何か重いものが移動された結果ついたものと考えられる。そこで、これを「レール状遺構」

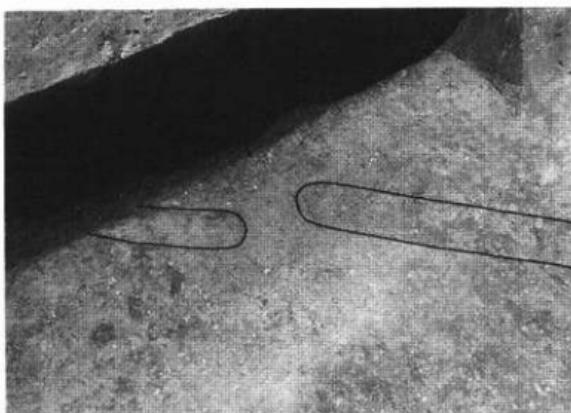


図8 「レール状遺構」のつなぎ目

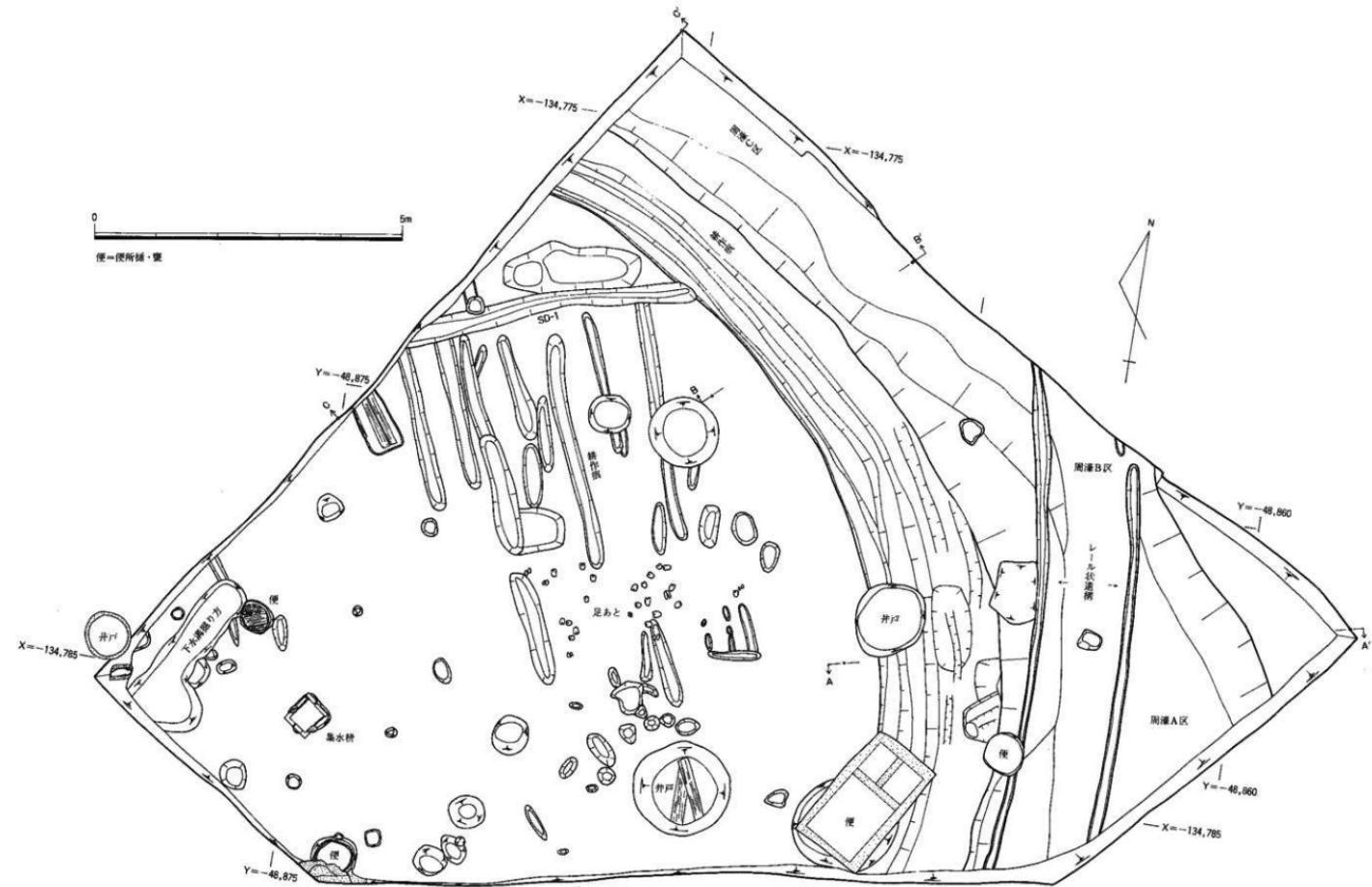


図9 遺構検出平面図

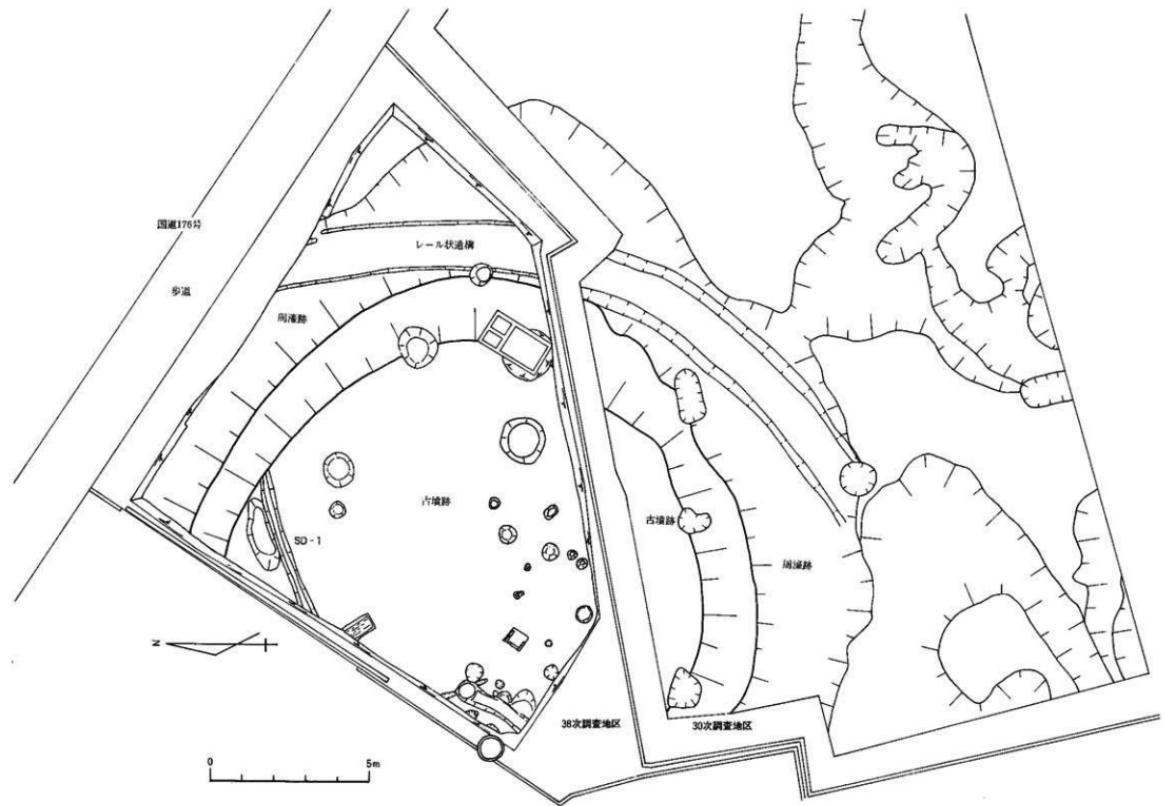


図10 第30次・38次調査 第3号墳平面関係図

と呼んでおく。

この「レール状遺構」は、古墳に立てられていたと思われる埴輪などを押しつぶしている点からみて、直接この古墳に関係したものではない。しかし、周濠が埋没するまでに敷設されているところから、敷設時期をこの古墳が造営されたのちあまり時間的に隔たりのないころとみることができよう。

(3) 古墳（周濠）跡

古墳は、前述したように遺体を埋葬した主体部はもちろんのこと、封土も残らないほど削平を受けていた。中世には、古墳の周濠を利用して耕作が始まられており、古墳が侵食され消滅に至った状況を耕作痕と堆積土層から読み取ることができた。その結果、古墳の基底部があたかも二段に成形築造されたように見えるのである。しかし、それはあくまでも古墳が、後世、侵食された結果であって、もとからこのようにつくられていたのではない。擾乱を受けない周濠の底には埴輪が転落した状態のまま足の踏み場もないほどに検出できたのに対し、二段目には埴輪が一次堆積した状況で残されていないこと、その上層(d層)から中世の遺物が散見できることは、そのことを如実に物語っていると言えよう。

古墳は、西半分が未調査のためその形状など全容解明は将来に譲らねばならないが、東半分を見るかぎり古墳基底部の直径18mをはかる古墳と考えられる。周濠の幅は、調査区東端で確認したところでは、多少の出入りはあるものの3~4mをはかる。それは第30次調査の状況ともよく合致している。

周濠内の遺物の出土状況は、周濠を南から北へ左回りにA・B・C区に分けると、B・C区の境を中心に埴輪の非常に大きな一群があり、B区にはややまとまった一群が見られるが、B・A区の境界あたりからA地区にかけては小さな一群はあるものの散在的に分布し、C区からA区にいくにしたがって希薄になる傾向にある。ただし、こうした埴輪のあり方とは違って、須恵器については、量的には少ないけれども、埴輪とは逆にA区に多く分布する状況がみられた。

V 出土遺物

ここでは周塗内e層出土の遺物を中心に、古墳に關係すると思われる遺物を扱う。出土遺物の大半は埴輪であり、それに少量の須恵器が混じっている。e層からは一個体になるとと思われる土師器数点がたまて出土しているが、表面の摩耗が激しく、また器形もよくわからず、古墳に伴うものかどうか不明につき、出土しているという事実のみを記しておく。

1. 須恵器 (図11 12~30・図12)

e層出土の須恵器は個体数も少なく、ほとんどが細片で完形品は見られない。环・高环・壺・器台・大型鉢などがある。

环 (12~17)

蓋・身とも数個体ずつ出土しているが、小破片のため大きさを割り出せないものもある。蓋の口径は13が12.6cm、14が14.6cmをはかり、天井の丸みはふくらみが小さく、天井部と口縁部を分ける稜線は鈍く、外側へ突出しない。12は13・14に比べて薄手でシャープさがあり、口縁部の立ち上がりも高く、天井部と口縁部の境界の稜線も外側へ突出し、やや古い型式を備えている。

身は、口縁端部が残存するものが1点のみである。15の口径は12.8cmをはかり、16・17もほぼ同じくらいの大きさである。口縁の立ち上がりはやや内傾し、受部は水平または外上方に張り出しが、端部の稜はあまり。底部は15がふくらみをもつようであるが、他は扁平になる。15が16・17に比べてやや古い特徴を残している。

高环 (18~22)

e層から4個体分が出土したが、脚端部のわかるものが二点ないため、d層出土で時期的にも同じである22を補完しておく。环部は2点あり、いずれも無蓋高环である。

环部は、18が口径11.6cm・环部高さ4.1cmをはかり、19は端部を欠損しているもののさらに小さくなり、全体に小型化している。口縁部と底部との境界には稜線もしくは段がめぐり、19の底部にはほとんど見分けのつかない櫛描き波状紋が施されている。

脚部は長脚もしくは長脚化のきざしをもつが、舟形の透かしをもつものはなく、脚下半に円形透かしを穿っている。

壺 (23~25)

大きくひずみを持った体部24と、口縁部23が見られるが、同一個体かどうかわからない。

23の口径は18.6cmをはかり、立ち上がりの短い割りに大きく外反し、口縁端部を肥厚させて丸くおさめる。24の体部上半にはカキ目が施され、厚く自然釉をかぶっている。

25は底部へラ切り離しのままであり、全体像がよくわからないが、煮か瓶の類ではないかと思われる。

器台 (26~29)

e層からは器台本体の底部と脚部が出土したが、口縁部は検出できなかった。a・b層からこの占墳のものではないかと思われる器台口縁部の細片を2点(26・27)採取しているので掲げておく。

26の口縁端部は上方に拡張し、口縁直下に2条の凸帯がめぐる。27の口縁は下方に拡張し、凸帯の下に櫛描き波状紋が見られる。

28の外面にはカキ目が施され、内面には同心円タタキが残る。

29の脚部には2条の凹線で区画された紋様帶があり、櫛描き波状紋と三角形と思われる透かしが刻まれてある。

大型鉢 (30)

あまり類例のない器形である。胎土は精選されてきめ細かく、色調は灰白色を呈する。体部はわずかに内灣し、短く上方に口縁をつくり出す。体部中央を2条の凹線で区画し、その中に雜な櫛描き波状紋をめぐらす。体部中央から口縁部にかけての間、棒で突いたような1cmほどの窪みが五段にわたって3~4cmの間隔で見られるが、ナテ調整により不明瞭になっている。底部がほとんど欠けているため、脚や高台が付くか否か不明であるが、残存先端部に小さな段が認められ、脚や高台が取り付いた痕跡ではないかと考えられる。また、底部の一部にヘラ線刻が1条縱に見られる。極くわずかしか残っていないため全体がわからず、ヘラ記号か、ただ単なる傷なのかはよくわからない。口径25.5cm、体部径27.3cm、残存高14.9cmをはかる。大きさは小ぶりで、時期が数段新しくなるが、大野城市牛頭46-I号窯跡に同様の形態のものが出土している。⁽¹¹⁾

甕 (図12)

同一個体と思われる甕腹片が調査域全体に散らばって出土したが、いずれも細片ばかりである。表面には平行タタキが、内面には同心円紋が施されている。平行タタキは上部では縱に規則正しく、下部に行くにしたがって斜格子状に交差し、底部近くでは不定方向に叩かれ格子状に変わる。同心円紋も上部と下部で異なり、上部では円弧が縱方向に、下部では横方向に規則的に重なり、底部近くでは不定方向に乱雜になっている。

器厚は、6~9mmである。

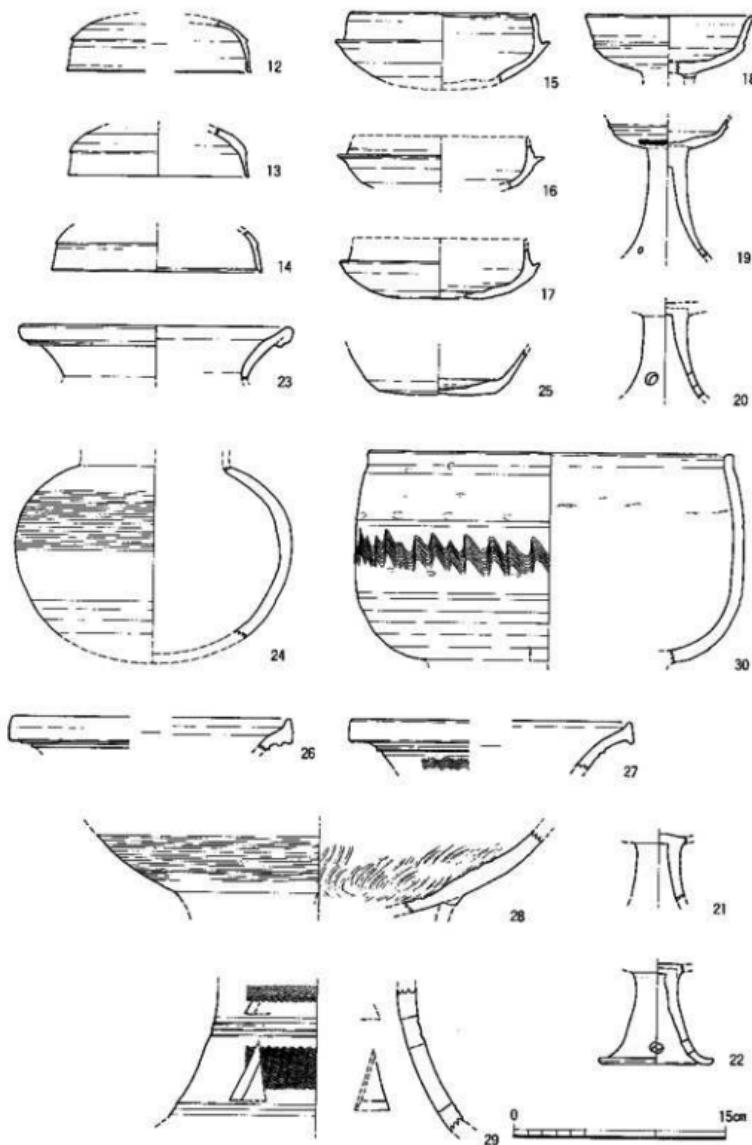


図11 須恵器

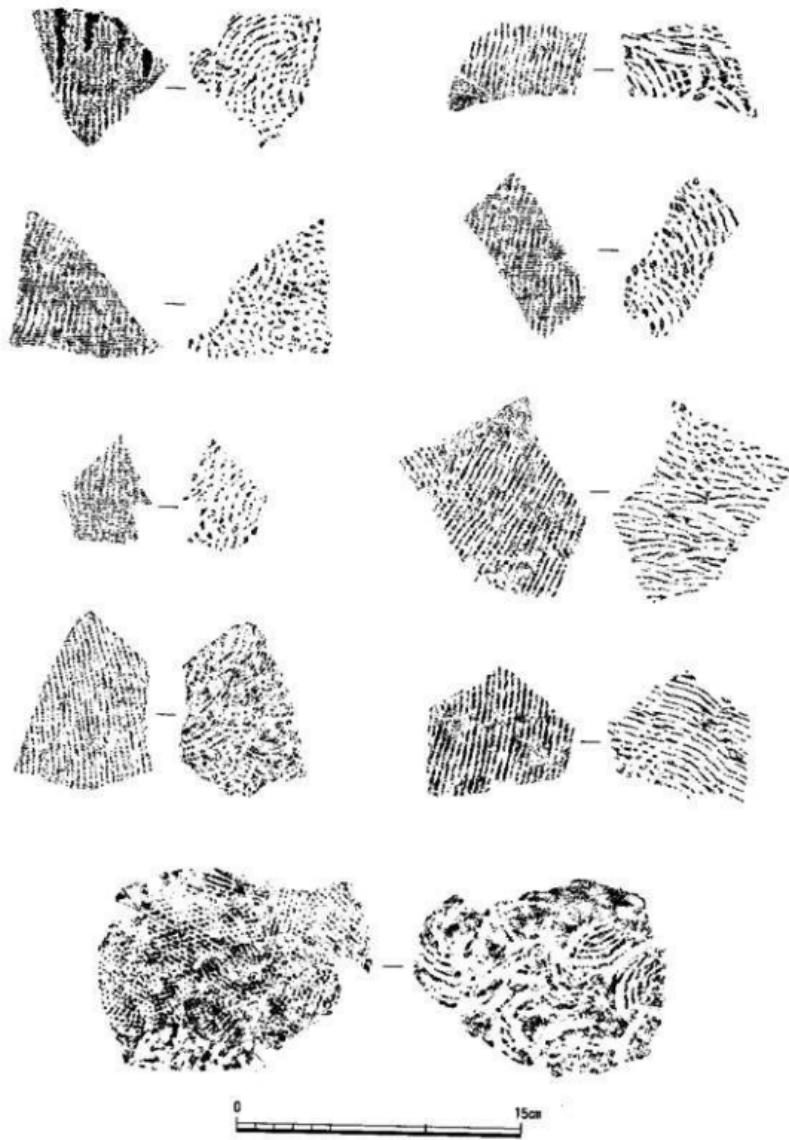


圖12 須惠器燒腹拓影

2. 墳輪（図14～30）

土師質のものと須恵質のものに大別される。量的には土師質が圧倒的多数を占め、須恵質のものは少量である。また、土師質の中でも硬質のものと軟質のものに分けられ、硬質のものは胎土も緻密で、器壁も薄くシャープで摩耗はほとんど見られないが、軟質の方は厚手のものが多く、全体に摩滅が著しく調整などわからないものが多い。

種類別に見てみると、土師質には円筒・朝顔・人物・家・蓋・盾・火刀など、須恵質には円筒・人物・家・盾などの形式があり、両方に確実に共通するのは円筒・人物・家・盾である。直径20mにも満たない小古墳ではあるものの、形象埴輪の豊かさが目につくのがこの古墳の特徴としてあげられよう。つぎにその主なものについてみてみよう。

（1）円筒埴輪・朝顔形埴輪（図14～18 31～71）

円筒埴輪には土師質のもの（42～71）と須恵質のもの（35～41）とがあり、その比率は土師質のものが圧倒的優位を占めている。円筒埴輪で全容を知りうるもの、ある程度復元できたものは、土師質のもの2点、須恵質のもの1点の計3点と少ない。そのうち、土師質1点（42）と須恵質の1点（35）は、いずれも基底部を欠損するものの、口縁下30cmとほぼ同じ高さまで復元できた。おそらく地表に露頭している部分がほぼ同時に破損して転落したものであろう。この2点は焼成に違いがあるものの、形態、調整などの特徴は類似しており、出土地点も同じところに散在しており、おそらくこの2本は隣接して立て並べられていたものと思われる。

土師質のものは、精選された胎土で硬質に焼かれたもの以外は残存状態がわるく、形態や調整の特徴をつかめないものが多く、復元できるものはほとんど無い。須恵質のものも前述した35の一点を除いてすべて小破片である。なお、形象埴輪の多さから見て、形象埴輪の円筒部分がかなりの量含まれているものと思われるが、識別不可能なため円筒埴輪として扱った。

朝顔形埴輪は4個体以上あると思われるが、全体を復元できるものが無く、確実なものを図示した。すべて土師質で、精選された胎土を薄手に成形して硬質に焼いたもの（31）と、やや厚手で硬質のもの（34）、軟質のもの（32・33）に分けられる。なおa層から、表面は赤褐色であるが、内部が灰色に焼けた須恵質の破片が1点出土しており、須恵質のものが立てられていたことも考えられる。

形態の特徴

全容を知りうるもののが少ないので、基底部から口縁部に向かって立ち上がる外反度が低い

筒状のものが多いようである。48は唯一全体がわかるもので、タガ3条によって4段に区切られ、高さ40cmをはかる。復元底径は20cm・復元口径は25cmで、4段目が異常に短くて口縁になるのが特徴である。

大きさは、体部直径17~20cm位のものと、22~25cm位のものとに、大きく大小2種類に分けられる。

朝顔形埴輪は、円筒部から口縁部にかけて図上復元できるものが2点(33・34)あり、円筒直径が22cm大と19cm大に分けられるし、二重口縁有段部のタガ直徑が24cmと19cmとがあり、円筒埴輪と同様大小の存在が想定できる。口縁部が残存するものでは、口縁径は35cm前後をはかる。

内外面の調整

土師質のほとんどは、表面の摩耗あるいは風化が激しく、詳細不明のものが多い。

外面調整は、大半が底部から口縁部にかけて左上がりの縦ハケであるが、極くわずか50のように右上がりと左上がりが錯綜するものと、55・56のように右上がりのものも見られる。ハケ目は6~8本/cmが主であるが、4本/cmの粗めのもの(43)が1点混じっている。44は、底部から口縫か詳らかにしえないが、右上りのタタキ目が施され、その後にナデ調整されている。また、須恵質の40のように、タガの一部にタタキ目が見られるものもある。成形段階ではすみで付いたものがそのまま残ったものと思われる。

内面調整は、ハケとナデが多用され、体部中央附近ではケズリ痕が残るものがある。底部と口縁部には横ハケが施され、体部中央部では斜め・縦ハケのちナデられるものが見られるものの、ナデのみの調整が生である。35・42の内面は、透孔より上にハケが施されており、その下は斜め縦方向に強いナデが行われている。

口縁部の形態と調整

円筒埴輪の口縁部は、口縁部を肥厚させないAタイプと、口縁部に2~3cmの粘土帯を貼って肥厚させるBタイプに大別される。

Aタイプはさらに細かく4つに分けられる。

a ほぼ直に立ち上がってきただ部からわずかに外反して広がり、端面がわずかに凹み、端部を外側につまみ出したようになるもの。口縁端部1cm以内を強くヨコナデする。(35・42)

b わずかに外反した口縁をそのまま「コ」の字状にまとめ、端面を凹ませるもの。a同様口縁部を強くヨコナデする。(43)

c 体部から直線的に伸び、すばまりながら端部が丸みをもっておさめるもの。口縁端までタタキ目が残り、無調整。(44)

d 薄く直に伸び、端面を内傾させるもの。摩耗激しく調整は不明。(48)

B タイプには、須恵質のもの(36・37)と、土師質のもの(45・46・47)がある。いずれにも口縁部が直立するものと、わずかに外反するものがあり、口径は21cm~25cmの間におさまる。36・45・47の外端面には1~2条の強いナデ状の浅い凹線がめぐる。外面のハケ調整は、須恵質・土師質ともに左上りの縦ハケが主体である。しかし、内面調整は須恵質と土師質で分かれ、須恵質のものは口縁下7cmまで横ハケが施されているのに対し、土師質のものにはハケ目が見られない。

このB タイプの口縁は小破片の上に出土点数も少なく、全容の把握が困難であるが、形象埴輪の底部の中に倒立技法により同様の形態のものがあり、場合によると形象埴輪の底部になる可能性も捨て切れない。

朝顔形埴輪は、口縁端部が大きく外反するものと、外反度の小さいものとに分かれそうである。外面は左上りの縦ハケ、内面は横ハケが施され、端部は円筒埴輪 A タイプの a・b に同じく、強くヨコナデされている。

タガ

基本的に台形である。タガの上面幅は5~10mmをはかり、全体に6~7mmのものが多い。裾幅は2~3cmで、高さは6~7mmが主である。

磨滅したものが多く、一概には決めつけられないが、高さがあつてきれいな台形を呈するもの、裾幅が広く低い台形を呈するもの、タガの上面幅が狭く尖り気味のもの、タガの上面が少し凹み M 形を呈するものに分けられる。

透孔

円弧状から直に切り込まれ半円形になると思われるもの(60)が1点あるが、あとは全て円形である。円孔の直径はおおむね4~6cmをはかる。

胎土

径1~2mmの石英を中心に長石、チャート、クサレ礫などの砂粒を適量に含み、相対的にきめの細かさが感じられる。土師質の中には、表面の摩耗・風化が少なく、肉厚が1cm以内の薄さでシャープ感のあるものは、よく精選された粘土を用いているものと思われる。

焼成と色調

土師質のものは、黄白色、灰黄色、黄褐色、黄橙色系のものに分かれ、なかでもクリーム色に最も近い黄白色のものは焼成も堅緻で、表面の摩耗・風化は少ない。須恵質の方は、灰色~灰青色を呈し、焼成があまく堅緻さの認められないものと、焼成堅緻なものとがある。

(2) 家形埴輪 (図19 72~81)

須恵質のもの1棟(72~76)と、土師質のもの2棟もしくはそれ以上(77~81)が配置されていたと思われる。しかし、いずれも部分または部品の破片ばかりで、全容を知りえるものはない。ここでは、須恵質家形埴輪(72~76)と土師質家形埴輪A(77・78)、土師質家形埴輪B(79~81)に分けて取り扱う。

須恵質家形埴輪

72~76は、よく精選されたきめの細かい胎土で同一個体と思われ、屋根部と壁部とに分けられる。

72・73・74は屋根の部分と考えられ、表面は刷毛調整されている。73には直径5mmほどの刺突孔が見られる。75は棟木で、表面は鋭くヘラ削りされ、上方を丸く半円形棒につくられている。これら屋根部にあたるところは、いずれも内部は須恵質に焼かれているが、表面はクリーム色に発色させられており、全体に柔らかい感じを受ける。

76は壁の部分で、下半に幅広の低平な突帯がめぐらされている。突帯より上部には斜めに刷毛調整が施され、突帯以下はナデ調整である。また、突帯の下には方形と思われる切り込みが認められる。突帯を境に調整の違いがあることや、下の切り込みの存在などからこの突帯を壁部と基台部を区切る突帯と見ることができよう。表面はクリーム色が霜降り状に発色するが、全体に灰色を呈し、固く焼成されている。

棟木の存在からみて、切妻造りまたは入母屋造りの形態が想定される。

土師質家形埴輪A

77・78がこれに相当する。屋根の軒部あたりと考えられる。1mm位のよく整った砂粒を多く含む精選された胎土で、黄白色を呈す。77は表面の摩耗激しく、調整等はよくわからないが、一部に刷毛目痕が認められ、平滑に仕上げられている。78は表面に斜めと縦方向の刷毛目が残る。どちらも屋根の四隅の部分にあたるのであろうか、緩やかに湾曲しながら角度を変えるものの稜線ははっきりしない。どちらかといえば、稜線を持たないといった方がよく、綾部市野崎4号墳出土の稜線が「定かでなく、格円錐形とでも言うべき形」⁽²⁾をした寄棟造りの家形埴輪(図13)と同形態の屋根に推定できよう。屋根の一部に長径1.5cmほどの楕円の穿孔が認められる。

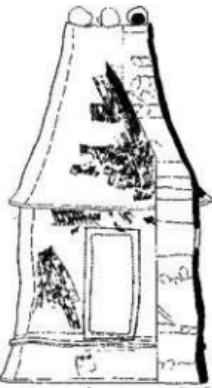


図13 野崎古墳群4号墳の
家形埴輪(1/12)

(小山雅人「野崎古墳群の埴輪と
土器製品」より)

土師質家形埴輪 B

79~81も家形埴輪の部分と思われる。いずれも土師質で1mm位の砂粒を多く含み、灰白色~淡黄褐色を呈す。79・80は表面に線刻と突帯が幾何学的にあしらわれ、屋根の一部ではないかと考えるが、小破片のためよくわからない。81は側廻りの部分にあたるものと思われる。全体に摩耗著しいが、表面の一部に刷毛目が、裏面に指ナデ様の痕跡が認められる。この3点は同一個体とする決め手がなく、別個体の可能性が高い。

(3) 人物埴輪 (図20・21 82~88)

須恵質のものと土師質の2体が存在する。須恵質の方は頭部(82)・腕(83)・体部(84・85)などが出土しており、胎土・焼成・色調から同一個体と推定でき、ある程度図上復元(図20 A・図21 B)が可能である。それに対し、土師質の方は腕と足と思われる円柱状のものが1点ずつしかなく、全体像は分からぬ。須恵質人物埴輪と土師質人物埴輪に分けて記述する。

須恵質人物埴輪 (82~86)

82は左腕頭部から後頭部にかけての破片である。上下にリボンらしきものをあしらったミズラが垂れ下がり、その上にはわずかに突出した鍔が表現されている。ミズラは長さ6cmで、その下端部は直径2cmあまりの円柱形をなす。後頭部にはその鍔から下に束ねた髪が垂れ下がっていたのであろうか、鍔と後髪の剥離痕が残っている。表面の色調は肌色に近い淡黄褐色に焼き上げられている。ほかに右側頭部などの小破片が2、3点見られる。

83は左腕である。親指を除く4指を欠損している。残在長は12cmをはかる。色調は灰茶色を呈す。

85は腰部に当たるのであろうか。稜線と稜線の間が中窪みになって鋸歯紋の線刻が施されている。おそらくベルトを表現したのであろう。そして、その下4cmにわたって粘土を薄く貼りあわせて衣の裾があしらわれている。また、下の稜線から衣の裾にかけて矩形の剥離痕が認められ、腰に何かがぶら下げられていたことが看取できる。色調は肌色に焼かれているが、火を強く受けたところは灰色を呈す。

84には、橙褐色の表面に暗灰褐色の小円錐粒が貼付けられているが、どの部分に当たるのかはよくわからない。明らかに色の違いでもって表現したものである。

86は、胎土・焼成具合から82~85の土台円筒部に当るものと思われる。色調は淡黄灰色を呈し、薄手で非常に堅緻に焼けている。表面には7本/cmの刷毛目が縦に施され、内面はナデ調整され指頭圧痕が残る。タガはややシャープに、低い台形状につくられている。

A・Bは82・83・85をもとに復元した図である。Aは後頭部で、Bはそれを反転して正面

を見た全体図である。頭にはミズラを結い、鈎のあまり広くない帽子をかぶっている。腰にはベルトが締められ、刀剣でもぶら下げられていたのであろうか。こういう人物像を想定してみた。

土師質人物埴輪 (87・88)

87は土師質の腕であるが、指部分を欠き、右手か左手か断定できない。83よりも小ぶりで、腕の付け根には肩部に装着するための窪み穴が見られ、接合痕が残る。表面は摩耗が著しい。

88は土師質の円柱状をなし、人物の足の部分と思われる。上方がやや太くなり、接合用の深い窪み穴が開けられている。下方には脚部を固定するために穿たれたのであろうか、細い穴がみられる。薄いクリーム色を呈し、摩耗著しい。胎土・焼成・色調とともに87の腕とよく似ており、同一個体と思われる。

(4) 箕形埴輪 (図22・23 89~99)

笠部の形態から3個体の存在が考えられる。それぞれの個体をA・B・Cとすると、Aには89~97を、Bには98を、Cには99をあてることができる。Aの笠縁部は強いナデ調整が施され肥厚しないのに対し、Cの縁部は肥厚する。Bの縁部は欠失しているが、A同様肥厚しないタイプであろう。いずれも土師質であるが、Aがもっとも硬質に焼けており表面の摩滅が少ない。B・Cに属する破片は1点ずつしか出土しておらず、ここではAに焦点を当てて記述することにする。

胎土・焼成・色調から89~97の部分は同一個体であり、図22のように復元できる。基台部が不明のため全体の高さはわからないが、笠口縁から立飾りまでの高さが40数cmに復元でき、全高55cm位に推定されよう。つぎに、それぞれの部分の名称を、89~92を立飾り板、93を立飾りの心、94を軸、95を袖受け、96を笠部、97を基台として記述する。

立飾り板

四方に翼を広げたようにキヌガサの頂部に取り付けられた飾板で、89~92の4点を検出した。89は先端部を欠くものの、90に先端部分が残っており、その全容を知ることができる。90・91・92はそれぞれ先端部・中央部・付け根部分の破片であるが、91は後で述べるように外側周線が1本のところを2本刻まれており、明らかに90・92とは区別される。90と92は、図上では結ぶことができるけれども厚さや焼け具合などの違いから別物とした方がよい。したがって、89・90・91・92は四方に配された別々の立飾りと見ることができよう。きれいな円弧を描いて立ち上がる立飾り板の推定高さは25cm、最大幅は約38cmをかり、内側に角状の突起（鱗）が1本伸びるもの、外側には鱗状の突起物などは一切認め

られない。古い型式のものには内側に1枚、外側に2枚の鱗が配されているのに比べれば、かなり単純化されているといえる。そして、線刻紋様も複雑な直弧紋や幾何学紋様は見られず、簡略化され、なおかつ雑にあしらわれた線刻で構成されている。内側突起は表面を線刻で二分し、外側側面にも上から下まで幅2mmほどの直線を1本あしらっているだけのものである。立飾り本体の紋様もまた、輪郭に沿って内側に2本、外側に1本の周線が刻まれ、その中を2本一組の直線でもって3ないし4等分しているだけのものである。ただし、91の片面には外周の線刻が2本めぐらされている。飾板の厚さは2cm前後をはかる。

立飾りの心

93は立飾り板と心棒とを組ぶ「十」字形をした部品で、高さ8.5cm・左右長さ10.5cmをはかる。一方が欠損し、三方が残っている。残る三方のうちのひとつに89の破断面が図のように組み合わさる。

軸

94は現存高6cmで、下半部を欠損するため全体の大きさはわからないが、上半部はラッパ状に広がる。ラッパ状に広がった上面は直径12.5cmをはかり、軸の中心に直径3cmほどのが貫通する。そのため、上面は幅4cmほどのドーナツ状の面をなしている。ドーナツ状の面には立飾り板を装着するための線刻が図版19（上）のように縦横無尽につけられている。

軸受け

口径11cm・高さ7cmをはかる。95は、軸を受ける筒部とその下端をめぐる突帯とが別々につくられており、下端の突帯は高さもあり、しっかりした段をもつ。口縁部はやや外傾して立ち上がり、外側に幅広の低い突帯をめぐらす。口縁の突帯と下端の突帯との間には7本/cmの刷毛目が残る。なお、口縁部外側の一部に長さ3cm・幅4cmの粘土の剥離痕が観察できる。立飾りが笠から簡単にははずれないように、軸と軸受けを固定するための粘土が貼られていたのではなかろうか。

笠部

前述したように、確実に3個体分を検出した。笠の大きさはいずれも同じくらいである。

96（A）は、同一個体と見られる破片が数点出土しているが、ほとんどが基台との接合部から笠縁にかけての部分で、笠の上部分は細片が1点みられるだけで大部分は失われている。笠径は31cmをはかり、表面には軸受けで見られた刷毛目よりも細かい刷毛目が斜めに施されている。笠縁部には幅1.5cmにわたって強い横ナテによる調整が観察される。しかし、骨組みなどを表現したと思われる線刻などは見られない。

98（B）も基台との接合部から笠縁にかけての部分で、縁部を欠いているため形態や笠

径などは詳らかでないが、96によく似た形態を呈しており、32cmほどの直径が求められよう。ただ、96のように反りをもたずには直線的に傾斜し、やや肉厚な感じをいだかせ、不定方向に施されたハケ目などに違いがもとめられる。色調は黄褐色を呈し、3点のうちで最も赤みをもった発色をしている。

99 (C) は笠縁部分にあたり、直径30cmをはかる。表面は摩耗激しく、調整などは不明であるが、笠の枠骨を表現したものであろうか、笠縁には幅1.3cmの低平な突帯があげられた。

基台

基底部と考えられるものとして97を掲げておく。底径14cmで、立ち上がりの外傾度は小さい。表面は磨耗しているが、7本/cmのハケ目が斜め縦に施されている。

(5) 大刀形埴輪 (図24~26 100)

B地区を中心にA・C地区にかけての広い範囲に散布して出土した。破片には勾金部・柄縁部・鞘口・鞘(刀身)部・鎗などがあり、図のように復元可能である。鞘(刀身)部は正面側がまったくといってよいほど残っていないのに対し、背面はかなりの部分が残っており、鞘尻部は鞘から段をもって拡張する。鞘のやや後寄りの横には鎗がつき、鞘の正面と背面にわかれる。鎗は鞘口から鞘尻まで連続して伸びており、途中に段を持ってベンギンが羽を広げたような形態をなし、一見スペースシャトルを思わせる容姿である。復元高は約50cmをはかる。焼成は土師質であるが、相対に硬質で、摩耗はほとんど見られない。

つぎに各部分についてみていく。

勾金

柄縁に接合する部分8cmほどが残っていた。幅4cm弱・厚さ1cmの帶状につくられ、ひねりを加えて外へ湾曲している。表面には2.5cm角の線刻区画が連続して刻まれ、その区画いっぱいに半球形の瘤が施されている。三輪玉のバリエーションか、鈴玉をあしらったものであろうか。同様の類例として和歌山県天神山古墳出土のものがあげられる。⁽³⁾

柄縁

柄間との変換点から鞘口まで残存する。円錐台形を呈し、勾金が取り付く。柄間との変換点の径は7cm・鞘口との接点の径は12cmである。

鞘口

柄縁と鞘との間に表現された部分である。断面が中継りの台形に作られているため、上端部と下端部に突出したような棱をもつ。高さ7cm、上端棱径13.4cm、下端棱径14.4cmをはかる。中央部には横位に綾杉紋の線刻があしらわれている。鎗が取り付く側の下半部に

は直径2.5cmの透孔があり、おそらく両側に開けられていたものと思われる。こうした断面中細りの台形の形は、実際の鹿角装刀剣の鞘口とよく似ており、それを模倣したものであることはまちがいあるまい。⁽⁴⁾ 鹿角装刀剣の実物の紋様は直弧紋や幾何学紋様が彫刻されているのが一般であるが、ここでは綾杉紋に変化し、紋様帶の幅も狭くなっている。紋様のあり方は本来の様相からかなり掛け離れたものになっている。

鞘部

鞘本体（以後 翳という）と鞘尻とにわかれる。鞘は、上部径14.2cm、下部径（鞘尻との接点）17.6cmの下脇につくられ、その表裏には6本/cmの刷毛目が斜め上・縱方向に全面に施されてある。鞘以外の部分には刷毛目が見られないことから紋様としての意識が働いていたのかも知れない。表面は残存部分から推定して、刷毛調整のち、鞘口の下3cmほどの所から綾杉紋の線刻が継続して全面に施されていたものと思われる。背面には鞘口から櫛にかけられていた粘土帯の剥離痕が残り、大刀に何かが結びつけられていたことが想定できる。粘土帯のひとつは鞘口の側面につく鱗の上端部を取り巻くように接合でき、これでもって大刀と鱗を結びつけていたと解釈できよう。粘土帯の幅は約3cm、厚さは8mmをはかる。

鞘尻は下半部を欠き、その全容は不明であるが、残存部の最大径19cmをはかり、柄縁同様横位の綾杉紋が線刻されている。鞘口同様、鹿角が装着された様を現わしたものであろうか。

鱗部

片側がほぼ完存し、鞘口から鞘尻まで装着されていた。鞘口から幅を広げながら下降してきた鱗は、22.5cm下がったところで段をつくってその幅を大きく拡大する。高さ35.5cm・最大幅10cm・厚さ1.5cmで、表面には草様のもので強くナデた跡が明瞭にのこるが、線刻などの紋様は一切施されていない。

大刀に鱗がつく類例は、奈良県三郷町勢野茶臼山古墳・滋賀県近江町狐塚5号墳・奈良県天理市荒古古墳などにみられ、大刀形埴輪の出土例が多い関東地方には鱗つきのものではなく、近畿地方を中心分布している。鱗の形状や取り付き位置を見てみると、勢野茶臼山古墳・狐塚5号墳の例は大刀の下半部に小さな矩形ないし台形状の鱗がつき、荒古古墳例は上半部に三角形の鱗がついているが、これほど長大なものではない。紋様は、勢野茶臼山古墳が無紋であるのに対し、狐塚5号墳には鋸歯紋などの線刻が、荒古古墳のには鹿を射る絵と鱗の縁取りに列点紋と鋸歯紋が施されており、必ずしも無紋とは限らない。大刀形埴輪の出土例が乏しく、そのうえ鱗つきの類例が少ないため、この鱗が何に当たるのかにわざに断定し難いが、最近、高槻市新池古窯址から出土した大刀形埴輪をもとに、大

刀に組み合わされた盾ではないかと考えられている。⁽⁸⁾新池古窯址の大刀形埴輪は、頭の一部しか残っておらず全容はわからないが、断面形が本物の刀の鞘そっくりにつくられており、その忠実な表現力からみて大刀形埴輪の原初的形態であることに疑いを入れる余地がないものである。鞘面には綾杉紋が施され、表面には盾が、背面にはこれまた忠実に表現された刀子が貼り付けられている。大刀に盾と刀子が組み合わさる注目すべき資料である。

畿内の大刀形埴輪はこの新池古窯址のものが基本的形態としてあり、その後の変遷の中でいろいろなバリエーションが生まれてきたのであろう。勢野茶臼山古墳や孤塚5号墳の鱗は紋様や形が盾としての表現を残しているし、荒蒔古墳のそれは形はともかく縁取りに縫い目を表す列点紋や鋸齒紋さらに大刀に盾を結びつけていたと思われる帶状の線刻が表現されていることから、刀子との組み合わせがなくとも、大刀と盾の組み合わせが一般的に取り入れられていたと推察される。

当古墳の大刀形埴輪は、鱗に紋様がなく、その形も盾から程遠いものであるが、鱗と大刀とを結びつける帶が粘土帯によって表現されていることから鑑みて、この鱗を盾と見ることができよう。また、刀子の組み合わせの有無については、大刀の表面・背面のどちらに取り付けられるのかわからないが、背面にそれらしい表現が見られず、期待のかかる表面の大部分が欠損している現状から保留せざるをえない。いずれにせよ大刀と盾とを組み合せた一種と見て差し支えないであろう。

(6) 盾形埴輪（図28 102～104・106～117）

盾形埴輪と思われる破片が相当数みられるが、全体がわかるものは全く無い。形状から見て、いわゆる盾形と右見型に大別できるので、ここでは分離して扱う。

須恵質（102～104）と土師質（106～117）とがある。

須恵質盾形埴輪（102～104）

須恵質の102・103は、茶灰色に堅く焼き締まっており、側辺に沿って革縫じを表した2本の線刻と列点紋があしらわれていて、同一個体と思われる。103には外向きの線刻鋸齒紋が見られる。内面が灰茶色、外面が橙色系に発色する104は、列点紋と線刻でもって不規則に区画されており、盾の内区を表現したものであろうか。102・103と104とは胎土や焼成からみて別物であり、2個体の存在が考えられよう。

土師質盾形埴輪（106～117）

土師質の（106～110）は、盾形埴輪によく見られる穿孔が破片で、盾の一部と考えられるが、無紋である。111は、短甲前胴の豊上段の形態によく似ているが、内側への反

りが無く直線的で、しかも右寄りに 1 ヶ所穿孔が認められることから盾の一種と考えられるものの、ほかに類例が無く、形態は不明である。側辺に沿って幅 1.5cm ~ 2 cm の粘土帯がめぐらされており、表面の一部に赤色顔料が塗られたような痕跡が認められる。粘土帯の左隅に同じ高さで円粒が補充されているが、反対側には無く、その意味するところは解らない。同様に粘土帯が施された破片が 3 点 (112~114) みられるが、別物である。

土師質の中でも、線刻がある 116・117 は硬質に焼かれている。115 は、摩耗激しくよく分からぬが、幅広の凹線でひし形に区画され、その中に細線が施された痕跡を認められる。土師質の盾形埴輪も、やはり数個体の存在を考えられる。

(7) 石見型埴輪 (図28・29 105・118~127)

大半の破片が土師質である。ただ、1 点石見型と思われる須恵質の破片があるが、小破片のためよく分からぬ。数個体の存在を考えられる。

須恵質の破片 105 は、黄褐色に発色し、ゆるく弧をえがく側辺をもつ。幅 3 cm の粘土帯の剥離痕が表裏に認められ、粘土帯がぐるっと巻かれていたことが窺える。粘土帯の下には、側辺に沿って 2 本の線刻と列点紋が片面にあしらわれている。

土師質のものは、無紋のもの (118~124) と、2 本線と列点紋が施された有紋のもの (125~127) とに分けられる。無紋のものは、2 個体以上あり、全ての表面にケズリ調整されたような強いナデが全面にみられる。122・123・124 は、盾本体の部分になり、118・119・120・121 は盾中央に突出する鰐の部分になろう。有紋のものは、革縫じを表現した以外には紋様はみられないが、表面は平滑でいねいに仕上げられている。色調・胎土・焼成がよく似ており、同一個体と考えられる。125 の上辺には幅 3 ~ 4 cm・高さ 5 mm 前後の粘土帯が張りめぐらされている。

土師質の大部分は、淡黄褐色系を呈し、硬質に焼き上げられている。中には 123 のように赤褐色に発色し、かなり硬質で須恵質に近い半須恵質とでも言えるようなものもみられる。

(8) 鰐つき埴輪 (図27・29・30 101・128~130)

同一地点から出土したものの中に図 24 (101) のように図上復元できるものがある。白黄色の土師質で、端部に粘土帯を貼って肥厚させた直径 23 cm の底部から先細りに立ち上がり、途中、くびれのある鰐が取りつく。鰐が取りつくあたりに上面幅 2 cm 余、裾幅 4 cm の幅広低平なタガがめぐる。このタガには鰐が剥離した痕跡が残り、鰐の下端がタガより下まで伸びていたことが分かる。全容が不明な上に、このタガが何を表したものなのか分からぬいため、単なる盾形埴輪を模したものなのか、あるいは大刀形埴輪になるのか決めかねる。

なお、出土地点がかなり離れているのではっきりしたことは言えないが、110の穿孔のある鱗が胎土・焼成・色調ともによく似ているので、同一のものとすれば、図のように取りつくかもしれない。とすれば、盾としての可能性が高い。類例を待ちたい。

また、128のような土師質の鱗もみられる。片面には直径7mmの低平な円形浮紋が2つ並んでつけられており、別面には側辺に沿って広めの浅い凹線が刻まれている。

129・130は無紋で、表面に強いナデのあとが残る。装飾的な鱗、とりわけ蓋の頭につく小型の立飾りかとも考えられるが、決め手を欠く。

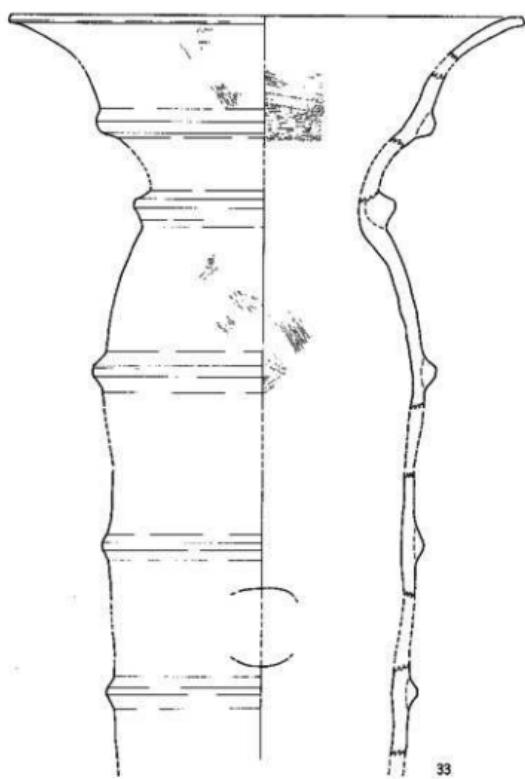
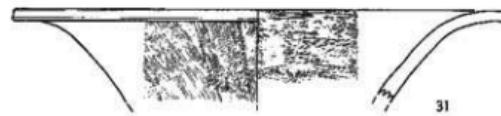
(9) その他の形象埴輪 (図30 132~145)

動物の足と思われる土師質円筒状の破片が4点(131~134)出土している。直径5~8cmをはかるが、これに取りつく上部が見当たらず、不明である。

135・136は土師質で、円筒状もしくは円錐台形を呈し、上部に剥離痕が認められる。136には透かしらしい円孔があり、台座として使われていたのであろう。

137・138・139・140は装飾として、141・142・143はベルトとしての用途のもとに使われた粘土帶の破片である。

144は、裏側が円筒埴輪に取りついていたような痕跡を残し、表面が「く」の字に折れて上下に拡張するのであるが、その正体はよく分からぬ。表面には刷毛目が不定方向に施されている。



0 20cm

図14 朝顔形埴輪 (1)

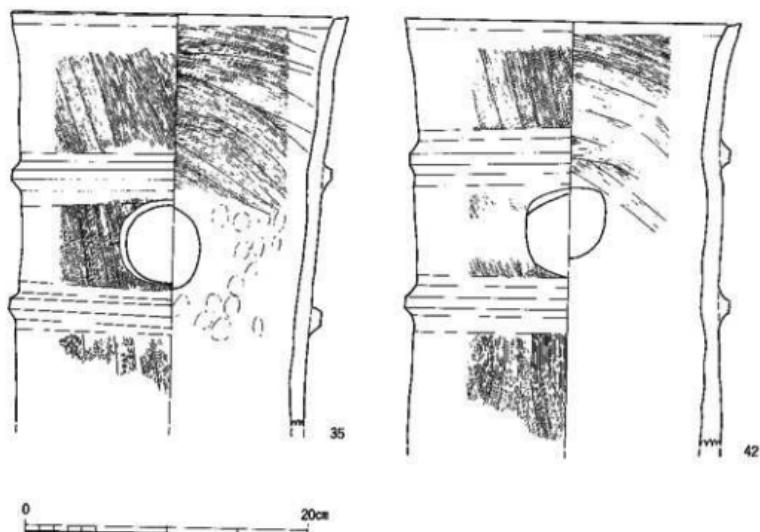
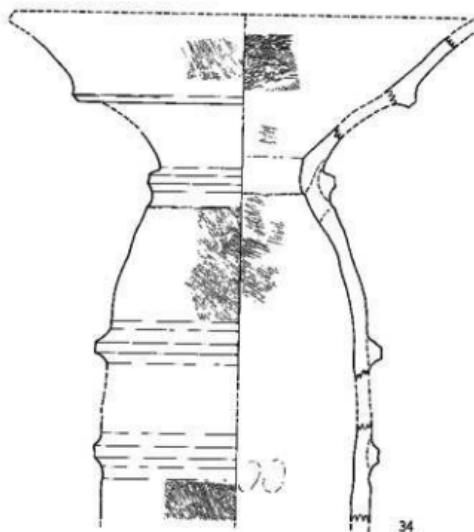


図15 朝顔形埴輪・円筒埴輪(2)

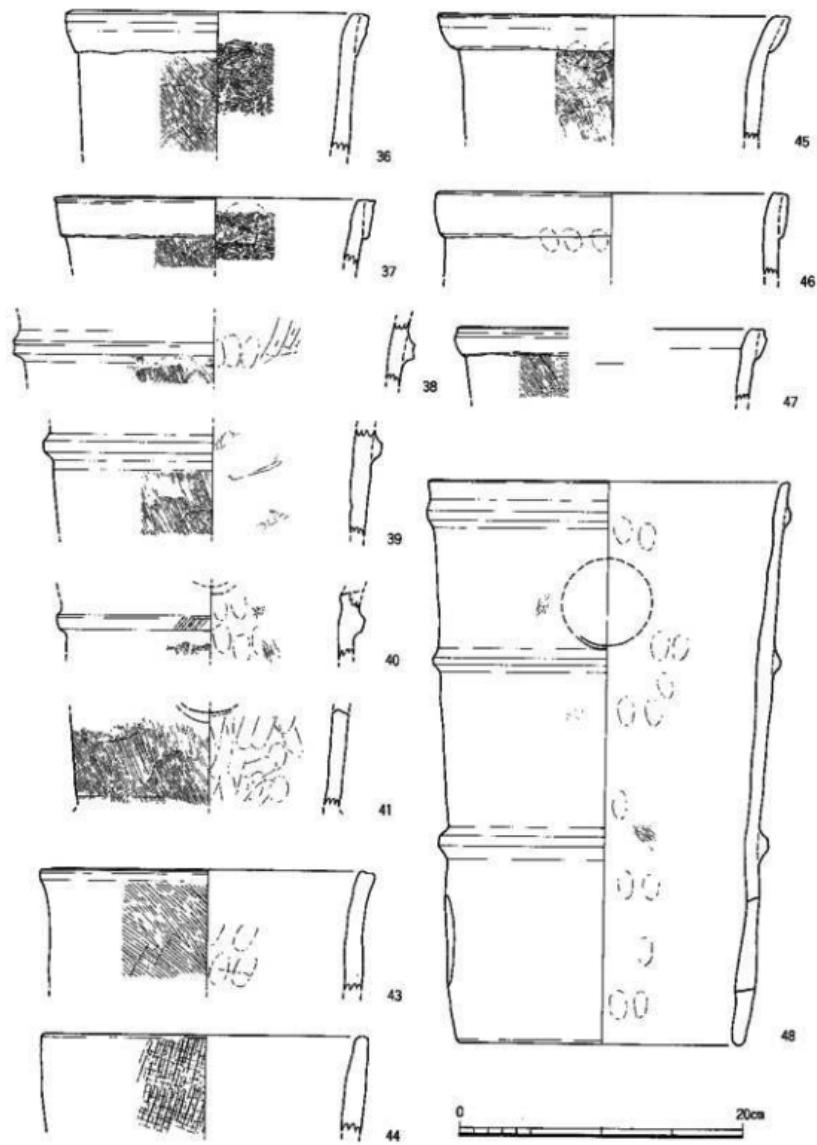


図16 円筒埴輪 (3)

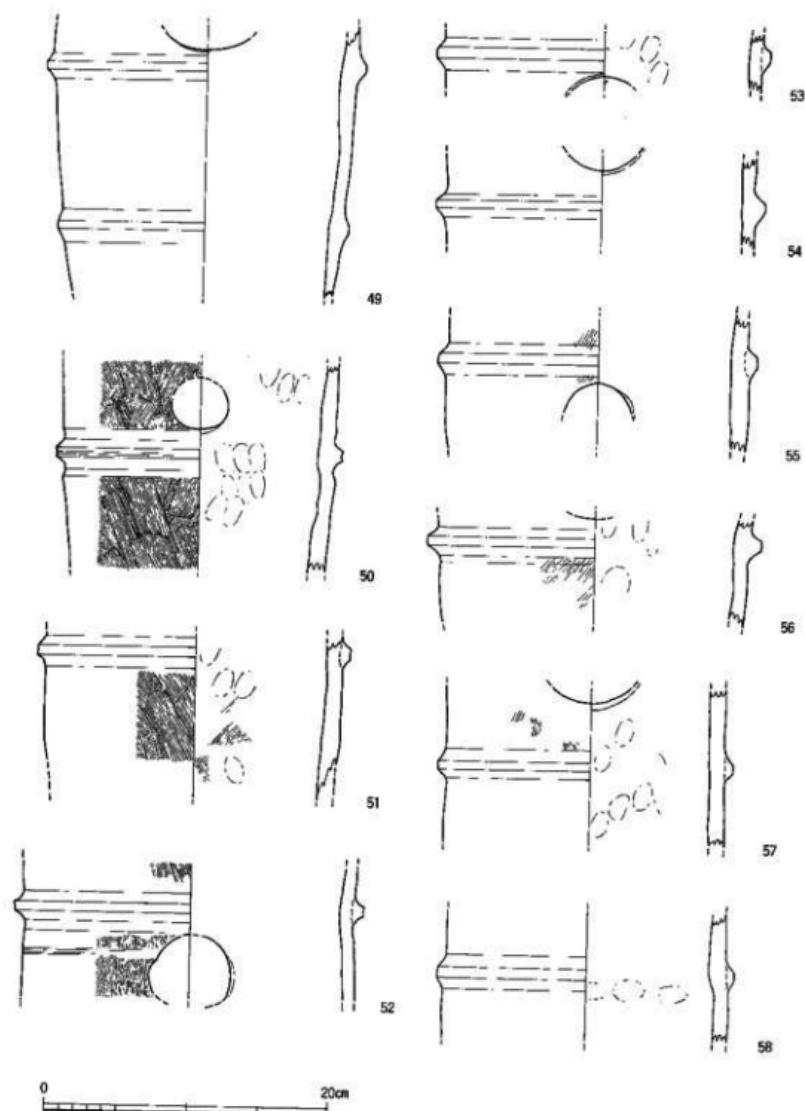


圖17 円筒埴輪 (4)

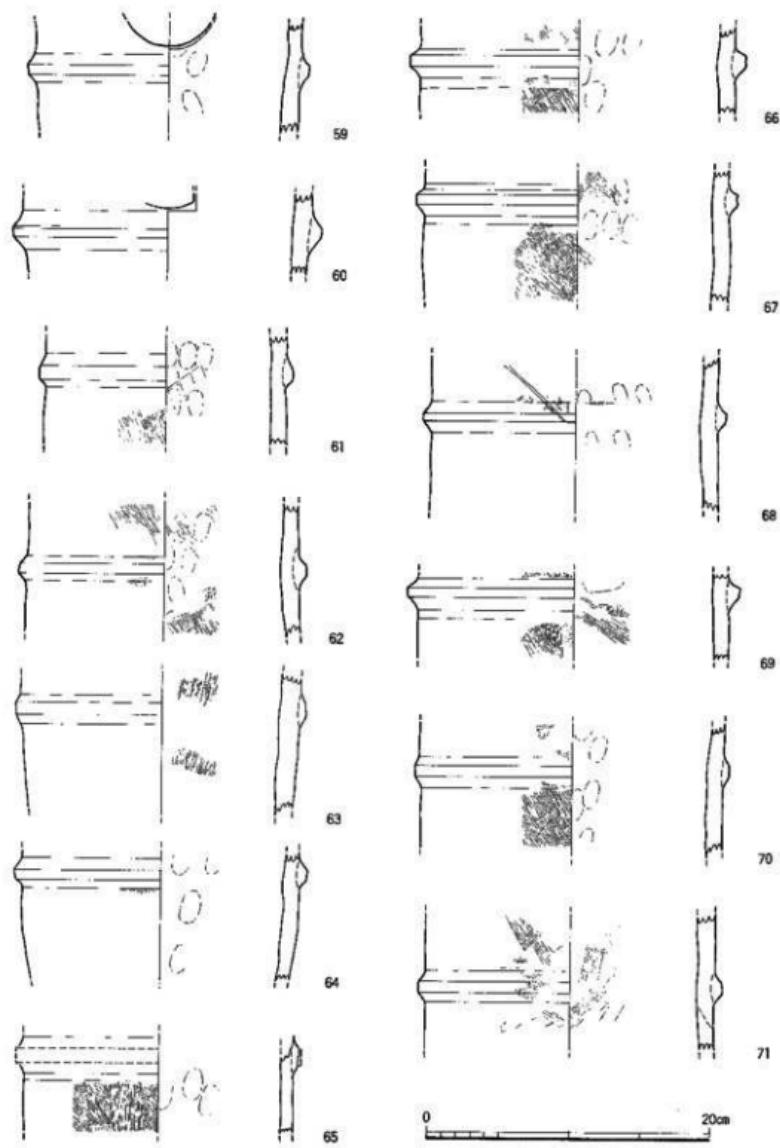


図18 円筒埴輪(5)

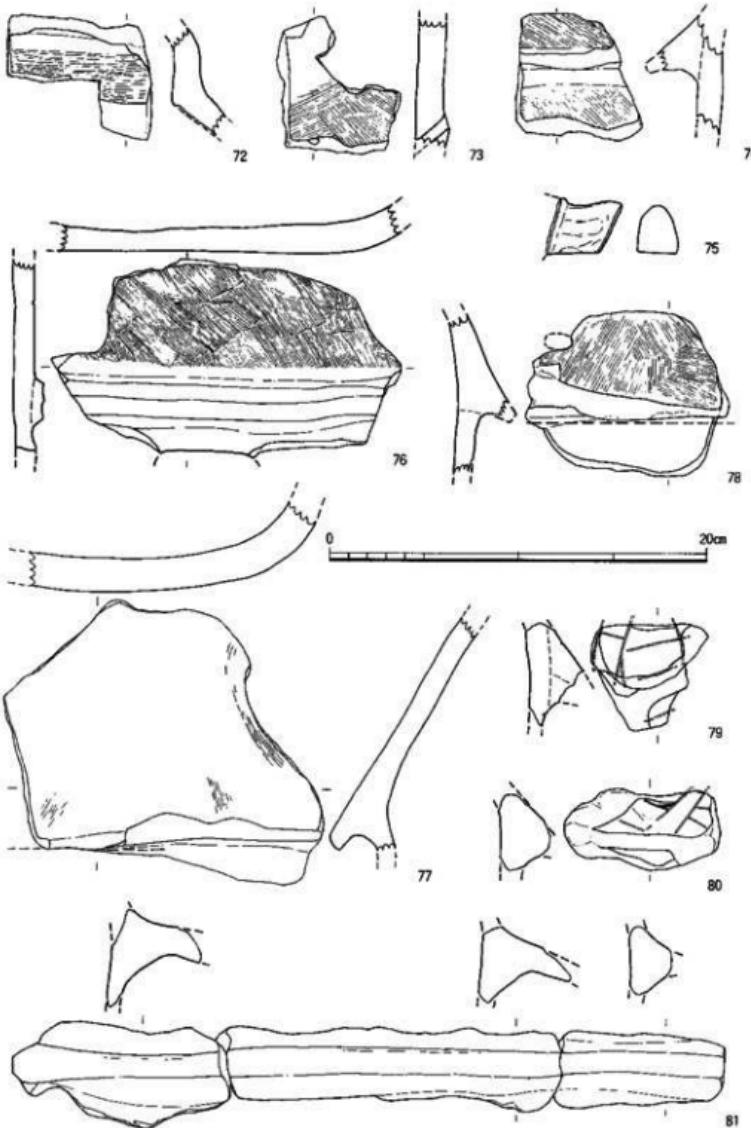


圖19 家形埴輪

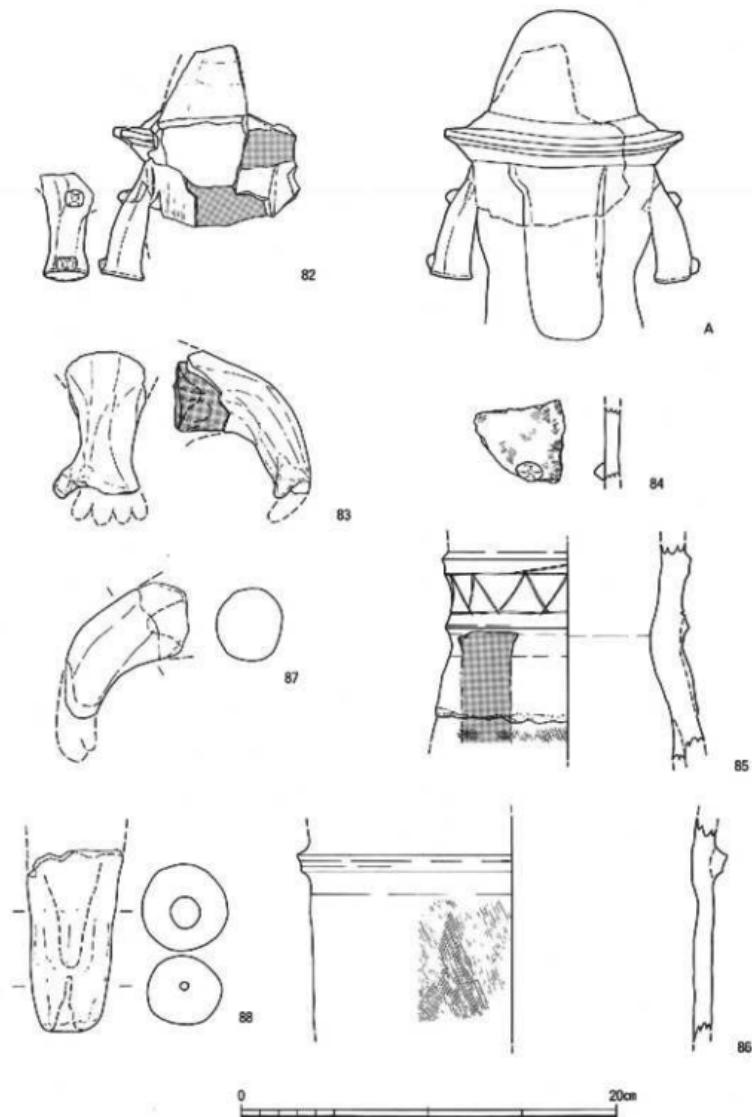


図20 人物埴輪・後頭部復元図（A）（網目は剥離紙）

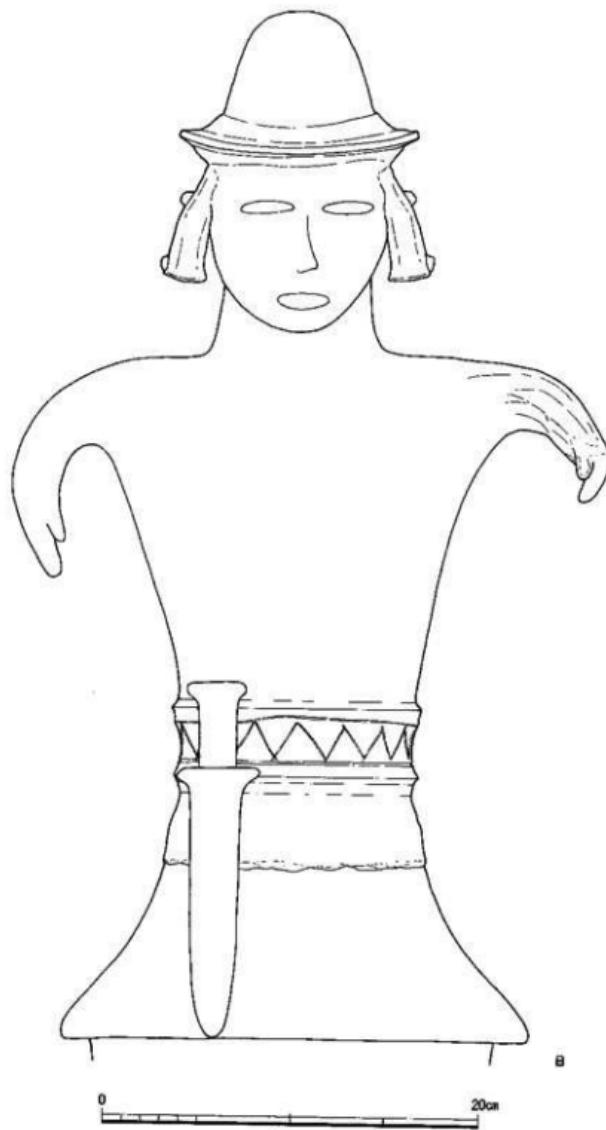


圖21 人物埴輪正面復元図（B）

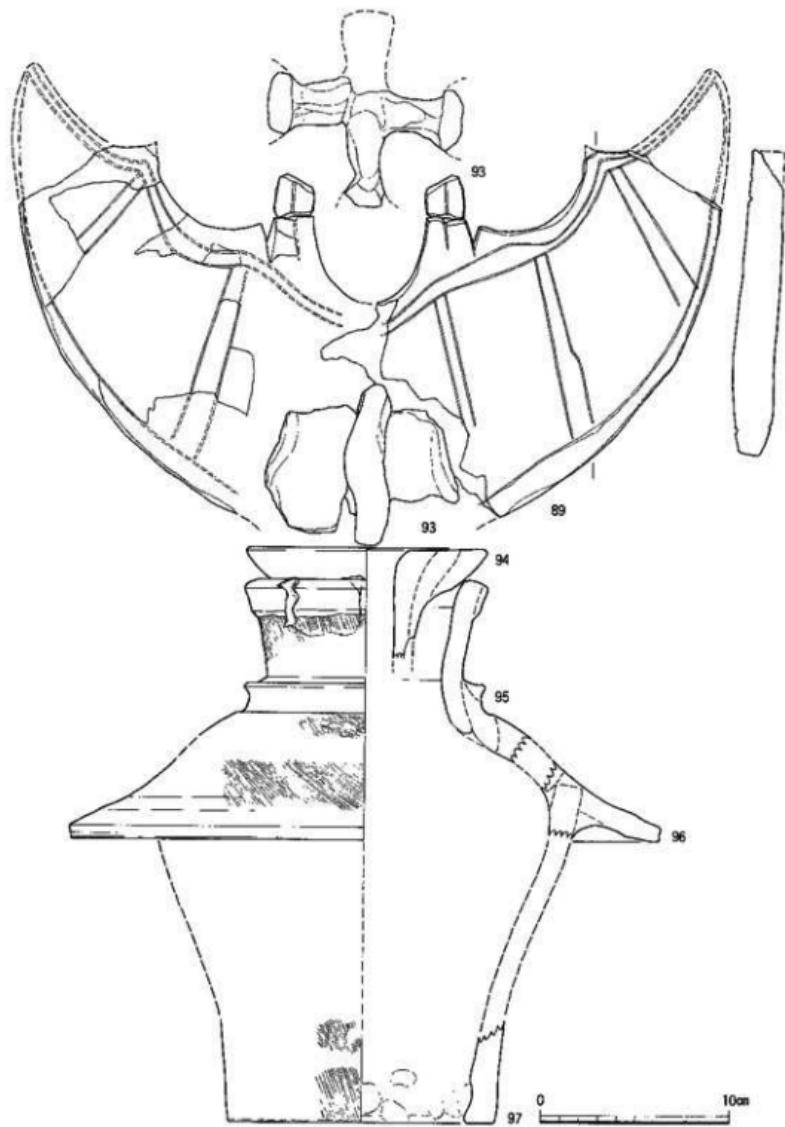


图22 盖形埴輪（1）

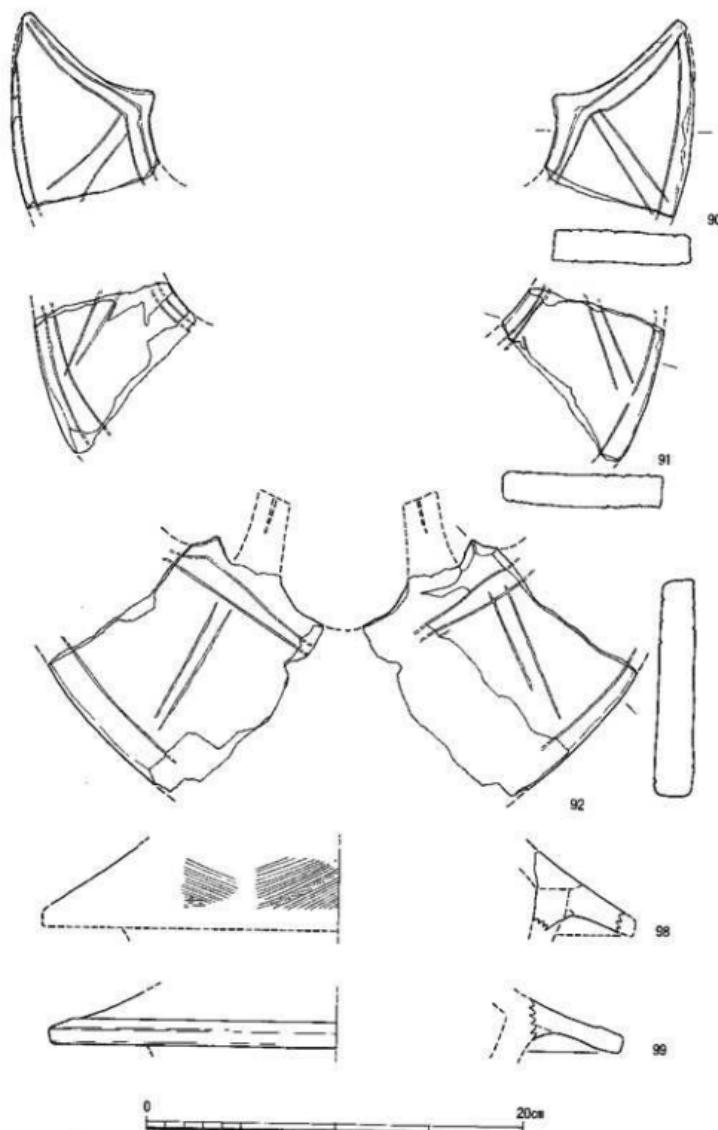


圖23 藍形埴輪 (2)

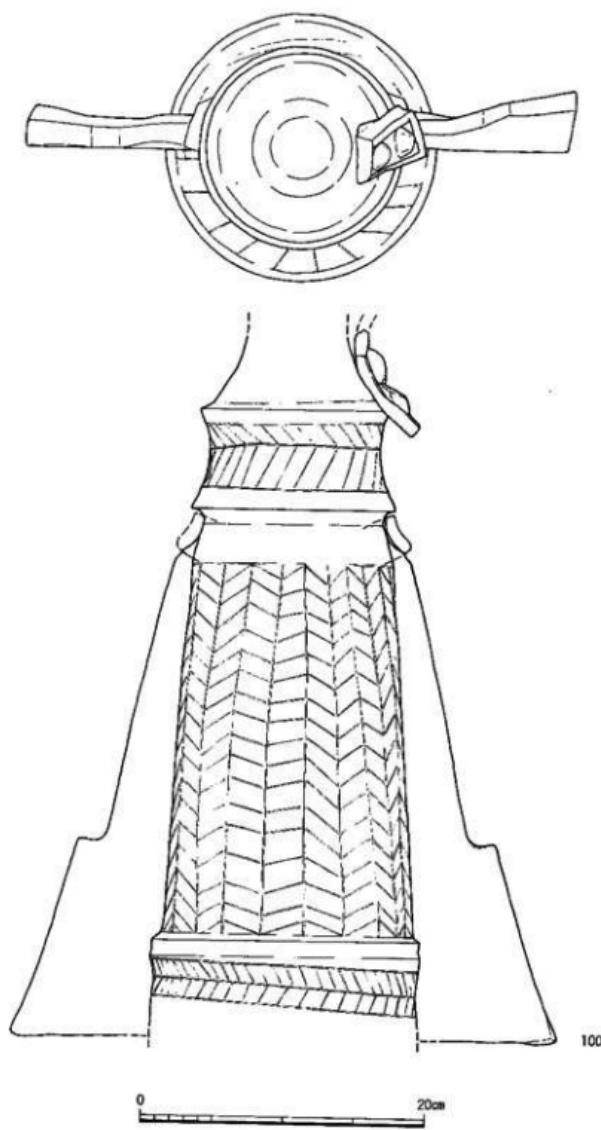


図24 大刀形埴輪（1）(正面図・指叢図)

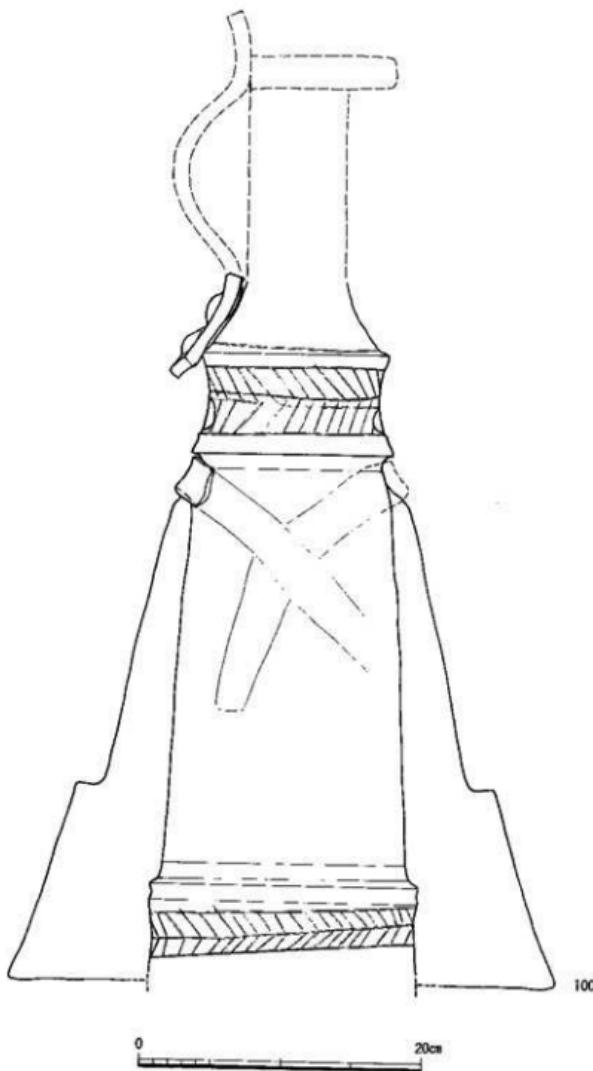


圖25 大刀形埴輪（2）（背面図）

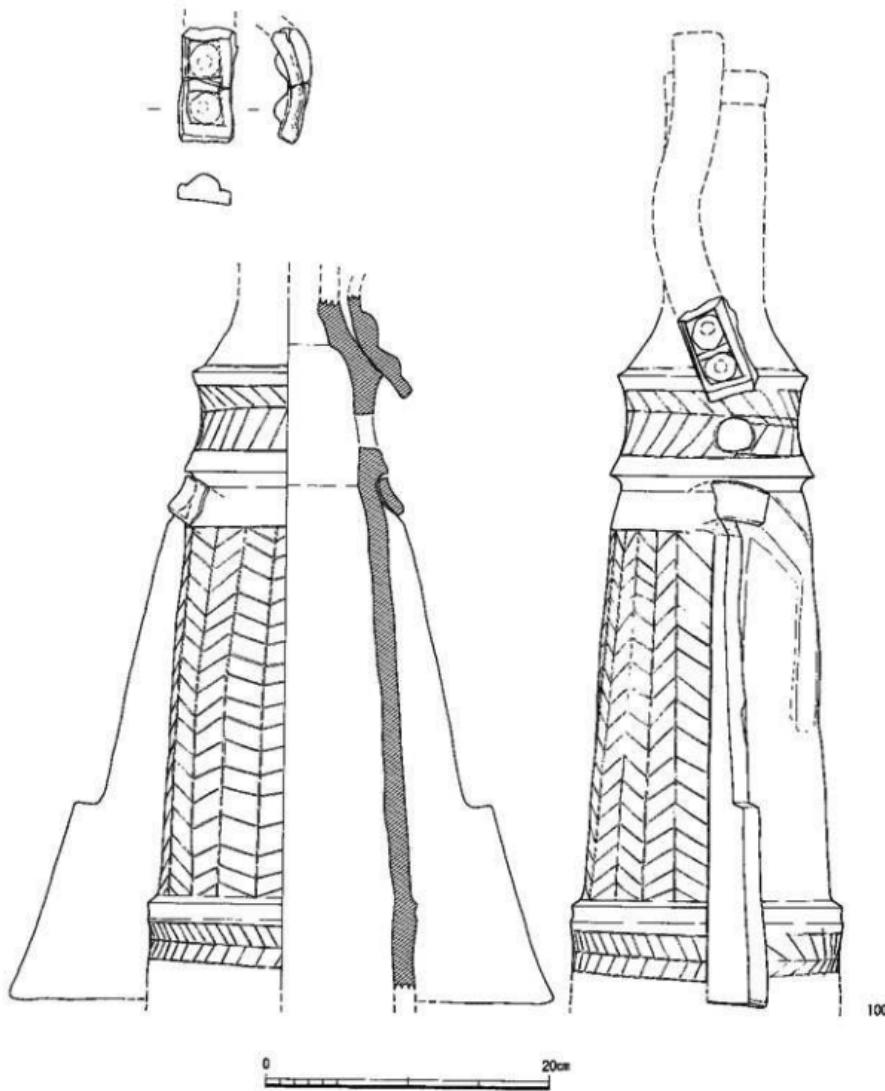


图26 大刀形埴輪（3）(断面図・側面図・勾金図)

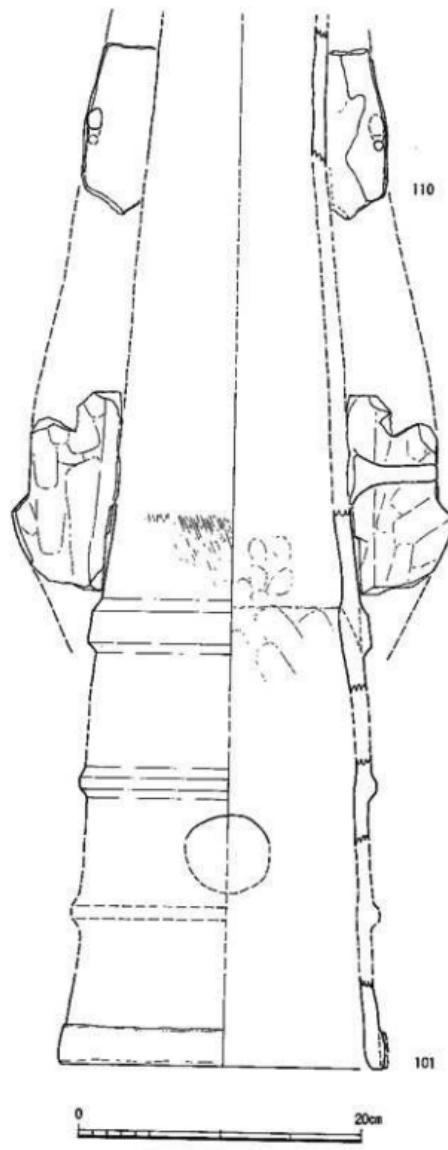


図27 踏つき坑輪

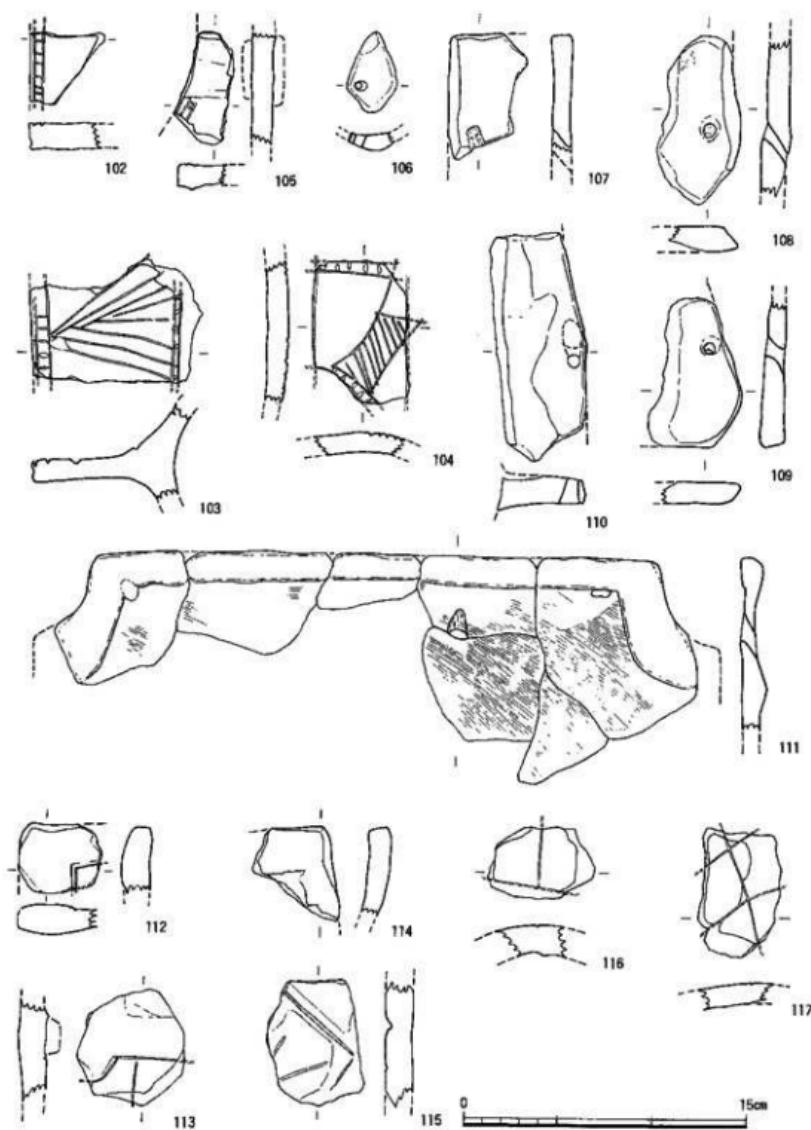


图28 菱形埴輪

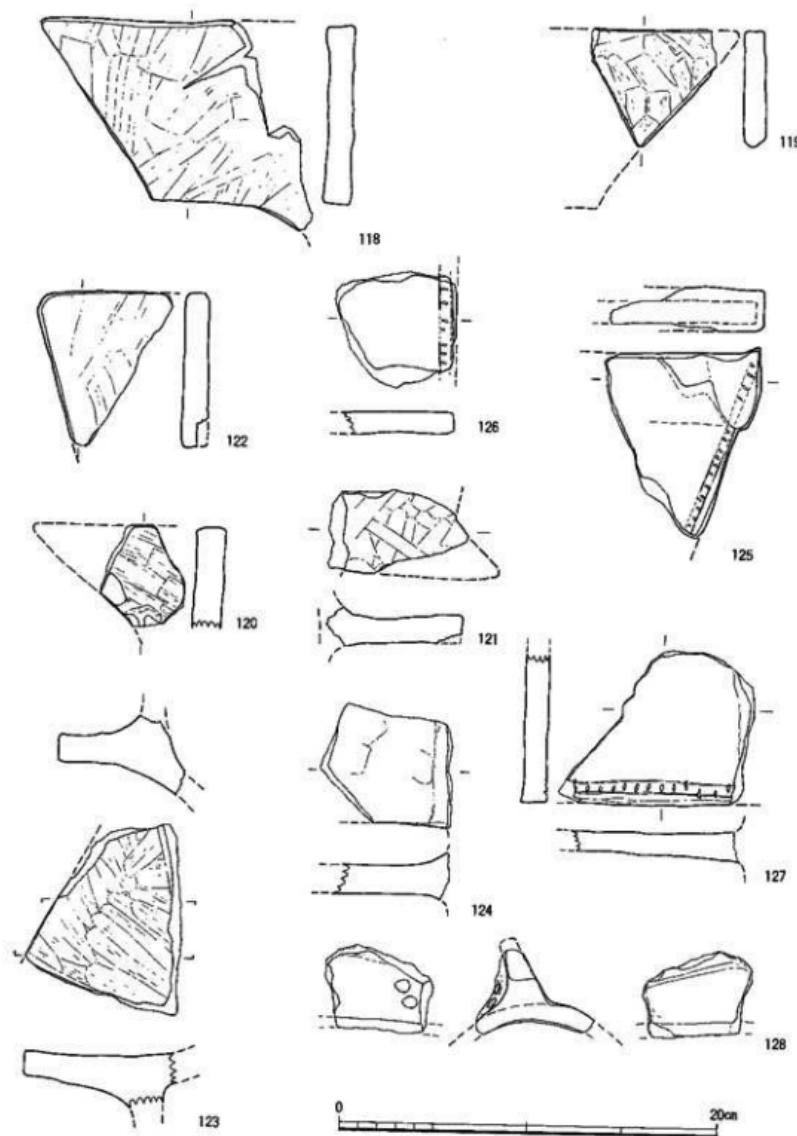


図29 石見型埴輪・鰐つき埴輪

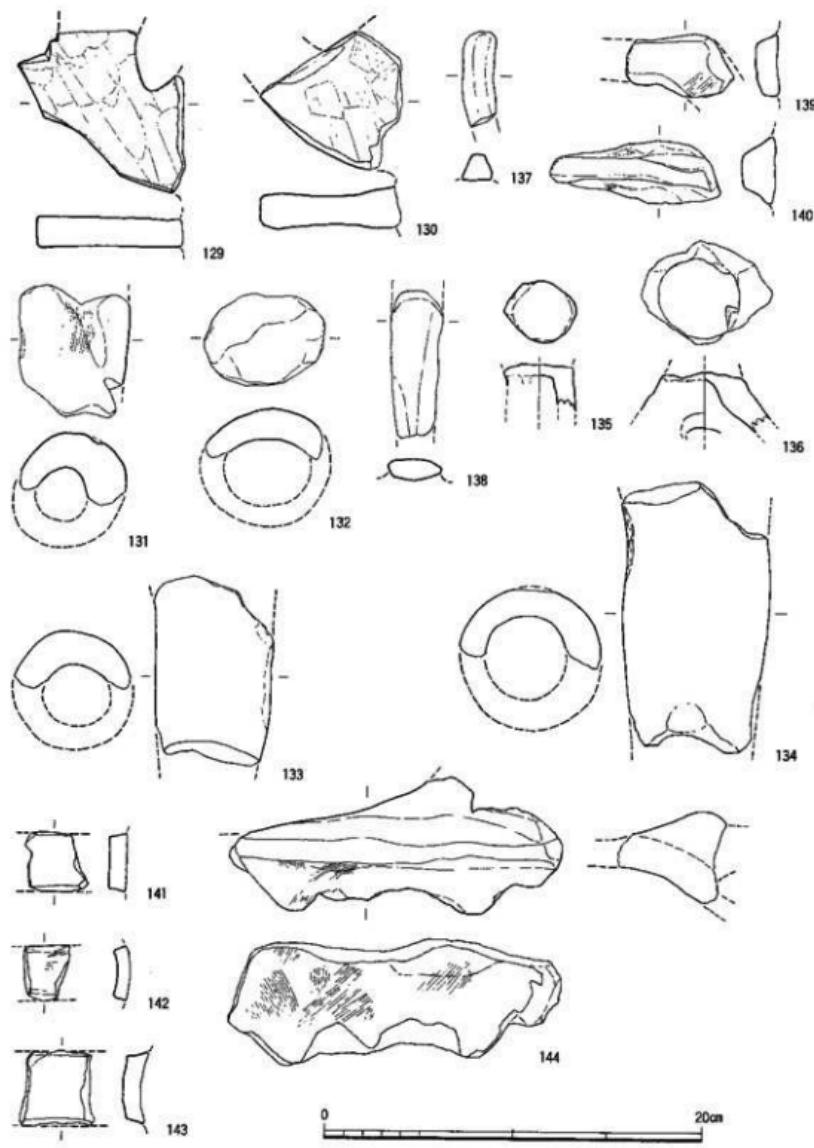


図30 豚つき埴輪・その他の形象埴輪

VI ま と め

1. 古墳の形態と規模

第30次調査と今回の調査により、新免古墳群第3号墳の東側の半分以上が発掘されたことになる。しかし、中世の田畠開墾のため封土はもとより、埋葬施設である主体部まで根こそぎ削平されて地山が露呈するにいたり、かろうじて周濠の底が残っていた程度で、周濠の検出がなければ古墳の存在はわからない状態であった。周濠の立上がりも幾度となく耕作のたびに侵食され、場所によってはかなり変形しているが、もとはきれいな円弧を描いていたであろうことは簡単に推察される。2回にわたる発掘調査成果を1枚につないでみると、図10のようになる。西半分が未調査のため断定できないが、円墳の可能性が高いであろう。これをもとに古墳の大きさをはかると、周濠基底部の直径が18mをはかり、古墳削平後、耕作による侵食をうけながらも残った地山の残存径は15mほどである。これをもとに、基底部からの立上がりに耕作による侵食された範囲を加味すると、直径16~17mほどの封土をもつた古墳であったろうと推定される。

⁽¹⁰⁾ 新免古墳群では、今までに確認された古墳は確実なもの5基、推定されるものを合わせて10基を数えるという。検出された古墳は全て、第3号墳と検出状況が同じく古墳の形状と周濠を確認できる程度であって、主体部がどのようなものであったのかまったくわからない。確実な5基の形態をみてみると、第24次調査で発掘された帆立貝形前方後円墳（2号墳）、円墳（1・3・4号墳）、方墳？（5号墳）から構成されている。

つぎに、大きさが不明の5号墳をのぞく4基の古墳の規模を比較すると、2号墳が復元長23m・前方部長さ6m・後円部直径17m、1号墳が直徑約13m、3号墳が直徑18m、4号墳が直徑16mをはかり、2号墳の前方後円墳を中心に直徑15m前後の古墳で占められていたようである。円墳の中ではいまのところ3号墳がやや抜け出ており、2号墳につぐ古墳であったと考えられる。

2. 築造時期と被葬者について

古墳の主体部は前述したように失われており、主体部に納められたであろう副葬品から古墳の年代観を得ることはできない。幸いなことに、周濠の底が荒らされずに残っており、多数の埴輪とともに須恵器を検出することができた。須恵器は量的にはそう多くはなく、おそらく古墳祭祀の際、古墳上に供えられたものの一部が埴輪とともに転落埋没したもの

と考えられ、古墳の年代を知るうえで重要な手懸りとなるものである。

須恵器と埴輪から古墳の年代を考えてみよう。

須恵器には壺・高壺・盞・器台・甕があり、ほかに特殊な大型鉢が1例あげられる。完形品はまったくなく、ほとんど細片である。いくつかの特徴を見てみると、壺の立上がりは内傾気味で高さも低くなる傾向にあり、口唇部は内側へ傾斜し、端部の稜はあまい。蓋は天井部と口縁部を分ける稜線がにくく、突出度もすくない。高壺には長脚化のきざしが見られ、脚裾には三方もしくは四方に円孔透しが穿たれている。こうした特徴の中には陶邑古窯址群のKM-1型式に類似点が求められるものもあるが、總体的にMT-15型式に比定されるものである。実年代でいえば500年代前半にあてられる。⁽¹¹⁾

円筒埴輪は直径25cmまでの小型のものばかりで、口縁は直立し、外面調整はタテハケ一次調整でおわり、二次調整は見られない。タガの幅は狭く、実高がない割りには高い感じを受け、端部稜線もまだ観さを残そうとする意識が働いているのか、極端な崩れはなくしっかりした感じを受ける。また、大型円筒の系譜を引くと思われる口縁部に粘土帯を貼りつけて肥厚させたものもあり、伝統的なものがまだ残っているものと思われる。しかし、伝統的意識を残しながらも形態の小型化、二次調整の省略はV期に相当するものである。V期は前・後に分けられ、前半には須恵器のTK-23型式が、後半にはMT-15型式があてられている。古市古墳群では、V期前半の古墳まで口縁部肥厚の円筒埴輪がともなうとい⁽¹²⁾うが、本古墳でみるかぎり後半まで残るものと思われる。

つぎに蓋形埴輪をみると、ここ数年、あいついで研究発表があり、その変遷や製作工程などが論考されている。⁽¹³⁾初期の蓋形埴輪は、忠実に蓋を模したと考えられ、笠の直径に対して立飾りは均整よく作られているが、時期が下るにしたがって立飾りが大きく華やかに表現され、笠は矮小化される傾向がみられる。笠木体よりも立飾りに重きがおかれるようになるのである。そのため、立飾り板に付された縫は拡張され、その占める割合が大きくなり、華やかさを一層引き立たせる結果となっている。反対に、笠表面の笠骨等の表現は省略され、しだいに表現されなくなる。本古墳の場合も例にもれず、笠の大きさの割りに立飾りの幅・高さ共に不安定な大きさに構成されており、笠表面の線刻などは一切省かれた新しい段階のものにあてることができる。ではどの段階に位置するのか、伊賀高弘の研究をもとに考えてみたい。

伊賀は、上人ヶ平古墳群14・16号墳の蓋形埴輪の立飾りの形態と紋様に着目し、最も古いとされる佐紀陵山古墳の立飾りを基にその変遷の位置付けを試みた。上人ヶ平14号墳と16号墳は円筒埴輪から、16号墳をIV期前半、14号墳をIV期後半に比定でき、これを前提に佐紀陵山古墳から上人ヶ平16号墳・上人ヶ平14号墳への変遷を図式化している。佐紀陵山

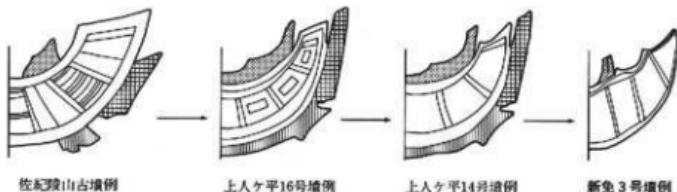


図31 蓋形埴輪の立飾り形態変遷図

(伊賀高弘「上人ヶ平墳群の蓋形埴輪」の第3図を製図・改変のうえ使用)

古墳の立飾り板には、内側に1枚、外側に上下2枚の鰐が取り付いているが、IV期の上人ヶ平16・14号墳の段階になると内外3枚の鰐は拡張され、立飾り板と一体化されたようになる。立飾り板の線刻紋様も簡略化され、IV期後半の14号墳の段階には外周線の中を二条の線刻でもって3区画に区切る程度で、内部の紋様は省略され単純なすっきりしたものになって、IV期における立飾りの変遷を窺うことができるものである。

こうした立飾りの変遷の中で、本古墳の立飾りをあてはめてみると、紋様の構成が外周線の中を二条線刻で4区画に割った簡単なもので、上人ヶ平14号墳によく似ていることに気づく。けれども、上部を矩形に区切った2本の外周線ではなく、立飾り板の外郭に沿ったものとなってしまっている。形態をみても、拡張・拡大してきた鰐ではなく、わずかに角状突起化した内側の鰐がみられるだけである。IV期に拡大し、その先端を角状に拡張した内側鰐の角状の部分が象徴的に残されたのであろう。また、IV期後半に立飾り板の上部に軽く抉りがはいり、先端が三角形に拡張するきざしは、さらにその度合いを強め、外周線の刻み方も外郭に合わせて三角にきざみ、三角突起化を強調しているかのようでもある。外側鰐が省略され、内側の角状突起と三角突起はトナカイの角を思わせるようなものとなってしまっており、これらの諸特徴から図31のように上人ヶ平14号墳のあとにつながる末期的な形態としてとらえられ、V期の範疇の中に位置付けられよう。

以上、須恵器、円筒埴輪、蓋形埴輪を抽出してその時期についてみてみた。その結果、須恵器はMT-15型式として、埴輪はV期の範疇でとらえられた。V期は古市古墳群の調査成果からTK-23型式以後に、そしてV期後半はMT-15型式を中心とする時期が与えられているところから、本古墳の時期をV期後半におくことができ、6世紀前半に築造された古墳ととらえておきたい。

つぎに新免古墳群の被葬者についてみておく。それについては、新免古墳群が形成された墳の新免遺跡ないしすぐ北隣の木町遺跡における同時期の遺跡のあり方が古墳群の性格

を考える上で重要なポイントとなることはいうまでもあるまい。数十次にわたって行われた発掘調査の中で、桜井谷古窯址群で焼成された須恵器の集積地やそれに関連する遺構が検出されており、当時、これらの遺跡は須恵器の集積・選別・流通の機能をもった集落遺跡であったと考えられている。⁽¹⁶⁾ 桜井谷古窯址群の形成は、陶邑古窯址群のTK-208型式の段階までさかのぼり、MT-15型式の段階になると爆発的に窯跡が増加するという。してみると、6世紀前半を中心とする新免古墳群の形成期は、桜井谷古窯址群の拡大・発展期あたり、新免遺跡を中心にかなりの活況を呈していたことだろう。こうした状況から、新免古墳群の被葬者を桜井谷古窯址群の須恵器生産に関与した豪族層であったと説かれるのは、順当な考えであろう。

しかし、確認された古墳はすべて、主体部はもとより、封土すら残されていない現状ではより具体的な手がかりを得るのは困難であるというのが現実である。今後、さらに調査・研究が進めば、被葬者はもとより、須恵器生産から流通まで、その実態が具体的に解明されていくことを確信し、ここでは須恵器生産から流通までを一手に掌握していた氏族の長、ないしはそれに近い人物が古墳を築造し、葬られたものと考えておきたい。

3. 墓輪にみる「赤」と「白」

この古墳の特徴のひとつに形象埴輪が多いことがあげられよう。そして、形象埴輪や円筒埴輪の中には、須恵質のものと土師質のもの、土師質でありながら硬質と軟質、赤っぽいものと白っぽいものがあり、焼成の違いや色調の違いを意識して配置されていたと思える節がある。たとえば、円筒埴輪の35と42、人物埴輪、家形埴輪、盾形埴輪のように須恵質と土師質に、朝顔形埴輪の33と34のように茶褐色で赤っぽいものと灰白色で白っぽいものとにわかれるように。発掘面積が周辺の1/4程度の狭い範囲に焼成や色調の違う埴輪が同一場所から出土するということは、それを隣接または近くに対峙するような形で並べられていたようでもあり、そのことに何らかの意味付けがあったのではないかと考えられないだろうか。

羽曳野市野々上埴輪窯跡群や堺市日置莊西町窯跡群の調査によると、質・色の違う埴輪が焼かれているという。野々上埴輪窯跡群では、窯体の位置によって赤褐色・黄褐色・乳白色・灰色の4通りに色調を分けることができ、灰色は焼成部前方に、黄褐色は中央部に、赤褐色は焼成部の奥に、乳白色は全体に分布が見られる。その割合は黄褐色が最も多く50%を、ついで赤褐色が35%を占めている。質的には、須恵質のもの2点を除けばすべて土師質で、赤く発色し須恵質に近い硬さをもつものと軟質なものがあり、須恵質に近いものには形象埴輪が多くみられ、軟質なものはほとんど摩耗しているという。日置莊西町

⁽²⁰⁾ 窯跡群では灰色系で薄手の硬質のものと、黄褐色系で厚手の軟質なものとの二者の存在が指摘されている。また、高槻市新池埴輪窯跡でも須恵質のものと土師質のものがみられる
⁽²¹⁾ という。

これらの事例から考えられることは、窯体内の火の回り具合や胎土の違いによって生じる色調や質の変化をうまく利用して焼き分ける工夫がなされたものとみることができる。須恵質のもの・硬質な土師質のもの・軟質な土師質のもの、そして赤っぽいものと白っぽいものとに焼き分ける、それを意識して焼成されていたのではないだろうか。しかし、このような焼成方法は須恵器生産の導入、すなわち登り窯の採用がなければ成り立たず、それ以前の埴輪は赤褐色か黄褐色の赤っぽい土師質なものでしかなかったのである。

もともと埴輪は宗教的な意味合いからか赤っぽいものでなければならず、わざわざ赤色顔料を塗って赤くしてある。登り窯採用以前の焼成方法では焼き上りが赤っぽいものであったがために、すべてに赤色顔料を塗らなくても色彩的には適合したものであったのである。おそらく埴輪は赤いものであるという伝統的な意識はもち続けられていたに違いない。

場所は畿内から遠く離れた関東の地、埼玉県に史跡埼玉古墳群がある。その中に金象嵌辛亥銘鉄劍で有名な稻荷山古墳がある。TK-23型式の須恵器をもった全長117mの前方後円墳で、発掘調査の結果、多数の埴輪が出土している。1980年に刊行された報告書をもとに埴輪の色調を調べてみると、すべて土師質の埴輪であるが、赤褐色の赤っぽいものと黄白色系の白っぽいものに分けられるようである。形象埴輪は破片も含めて32点報告されており、そのうち赤褐色系のものは25点、黄白色系のものは7点あるうちに赤色顔料が塗られているものは赤褐色のものに3点、黄白色系のものに6点みられる。赤褐色3点のうち盾1点は紋様として塗られたものである。円筒・朝顔形埴輪をみてみると、赤褐色系のものには赤彩はみられないものの、埴丘上から出土した黄白色のものすべてに赤彩が認められ、内濠出土の黄白色系の円筒では16%程度とすくないが、朝顔形にはすべてに赤彩が施されているようである。埴丘上と内濠の状況に対し、外濠出土のものは、赤褐色のものが25%にも満たない少なさであるうえに、黄白色系のものに赤彩されたものが数点しか見られない現象が認められる。このことから、主体部に近いところの埴輪には、その大部分に赤色顔料などを施し赤く見せることに意識が働いていることは肯定できよう。

稻荷山古墳の例は畿内から遠く離れ、須恵器の導入はあるものの、埴輪を登り窯焼成したかどうかは不明で、そのまま畿内の状況にあてはめられないが、埴輪に対する意識はおおむね見てとることができよう。

ところが、登り窯で埴輪が焼かれるようになると、焼かれた埴輪に灰色で須恵質のもの

がざるようになって、埴輪に対する意識が大きく変わっていったのではなかろうか。必ずしも埴輪は土師質で赤くなければならない、ということはなくなつたのである。とはいひものの、伝統的な赤への憧れは捨て切れず、須恵質の埴輪の中には赤色顔料などを塗って焼成し、赤くしようとしたものもみられる。灰色すなわち白っぽい色にならぬようにしたのか、白っぽいものと区別しようとしたのか、あるいは特別な意味をこめたものであろうか。こうした動きの中に、色の違いや質の違いを巧みに組み合わせる意識が芽生えるのは当然であろう。赤っぽいものと白っぽいもの、土師質のものと須恵質のもの、軟質な土師質のものと硬質な土師質のものといった組み合わせは、前者を「赤」に例えれば後者を「白」に例えることができよう。言なれば、「赤」と「白」とが組み合はさって立ち並んだ埴輪列、そんな中に新しい埴輪の世界観が見えるような気がしないでもない。

本古墳では、埴輪がどの位置に、どのような配置で立て巡らされていたのか、知りようもないが、狭い範囲での発掘調査の中で、器種によっては「赤」と「白」の埴輪の組み合わせがあったものと思われ、新しい規範に基づいて立て並べられていたとみることはできないだろうか。埴輪をめぐる意識変革がいつの時期または段階で起こつてくるのか、的確な材料を持ち合わせていないので明言は避けたいが、この古墳がつくられたV期後半・6世紀前半にはすでに移行していたことは確かといえよう。そして、こうした埴輪の取り扱いに関する意識の変化、すなわち埴輪にこめられた思い入れが形骸化されていく中に古墳の変質も見られるのではないか。

註

- (1) 舟山良一「須恵器の編年 九州」「古墳時代の研究6 土師器と須恵器」雄山閣 1991
- (2) 小山雅人「野崎古墳群の埴輪と土器と土製模造品」「京都府埋蔵文化財情報」第25号 1987
- (3) 坂靖「埴輪文化と地域性」「考古学と地域文化」同志社大学考古学シリーズIII 1987
- (4) 末永雅雄「魔角菱刀剣」「考古学」9-7 東京考古学会 1938
- (5) 伊達宗泰「勢野・茶臼山古墳」「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告」第23冊 奈良県教育委員会 1966
- (6) 近江町教育委員会「孤塚5号墳」「断夫山古墳とその時代」第6回東海埋蔵文化財研究会資料V 1989
- (7) 朝日新聞社「古代史発掘'88~'90」新遺跡カタログ VOL.3 131頁 1991
- (8) 高橋克壽「器財埴輪」「古墳時代の研究」9 雄山閣 1992
- (9) 森田克行氏の教示を得、高槻市立埋蔵文化財センターにて実見させていただいた。
森田克行「新池 新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書」高槻市文化財調査報告書第17冊 1993

- (00) 豊中市教育委員会「新免占墳群の調査概要」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第25回)資料』
助大阪文化財センター 1992
- (01) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- (02) 川西宏幸『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』64-2 1978
- (03) 天野末喜・松村隆文『埴輪の種類と編年 円筒埴輪一近畿一』『古墳時代の研究』9 雄
山閣 1992
- (04) 田中秀和『畿内における蓋形埴輪の検討』『ヒストリア』118 1988
高橋克壽『器財埴輪の編年と古墳祭祀』『史林』71-2 1988
伊賀高弘『上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪』『京都府埋蔵文化財情報』第32号 助京都府埋蔵
文化財調査研究センター 1989
- 松木武彦『蓋形埴輪の変遷と画期一畿内を中心として』『鳥居前古墳一總括編一』大阪
大学文学部考古学研究室 1990
- 松木武彦『蓋形埴輪の型式と範型』『究班』埋蔵文化財研究会 1992
- 櫻井久之『長原40号墳の形象地輪』『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』IV 助大阪市
文化財協会 1991
- (05) 註02 伊賀高弘に同じ
- (06) 豊中市教育委員会「新免遺跡19・21・22次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1987
年度』1988
- (07) 木下亘『槇津桜井谷古窯跡群における須恵器編年』『桜井谷窯跡群2-17窯跡』少路窯跡遺
跡調査団 1982
- (08) 註00に同じ 塚部聰志氏発表内容
- (09) 羽曳野市教育委員会「野々上埴輪窯跡群」「占市遺跡群」III 羽曳野市埋蔵文化財調査報
告書7 1981
笠井敏光「野々上埴輪窯跡群」「大阪の埴輪窯」助大阪文化財センター 1989
- (10) 十河稔龍「日置莊西町窯跡群」「大阪の埴輪窯」助大阪文化財センター 1989
- (11) 森田克行氏の教示を得た。
- (12) 埼玉県教育委員会『埼玉・稻荷山古墳』1980

参考文献

- ・後藤守一「上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳」『帝室博物館学報』第6冊 1933
- ・末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第13冊
1935
- ・田辺昭三「陶邑古窯址群」I 平安学園考古学クラブ 1966
- ・和泉市教育委員会「光明池第1号窯跡発掘調査概報」1979

- ・大阪大学埋蔵文化財調査委員会『待兼山遺跡II』1988
- ・朝大阪市文化財協会『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告』I・II 1988・1990
- ・風間忠雄「家形埴輪の研究』『京都府平尾城山古墳』古代学研究所研究報告第1輯 1990
- ・奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1991
- ・奈良市教育委員会「近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』1992

図版



遺跡周辺航空写真



調査区全景垂直写真



発掘調査状況と周辺の概況



発掘調査全景



耕作痕・SD-1等の遺構検出状況（北より）



同上（西より）



周濠内埴輪検出状況（北より）



完掘後周濠の状況（北より）



A・B地区周濠内埴輪検出状況



周濠内「レール状遺構」



周濠内A断面 (A'-A)



周濠内B断面 (B-B')



周濠内C断面 (C-C')



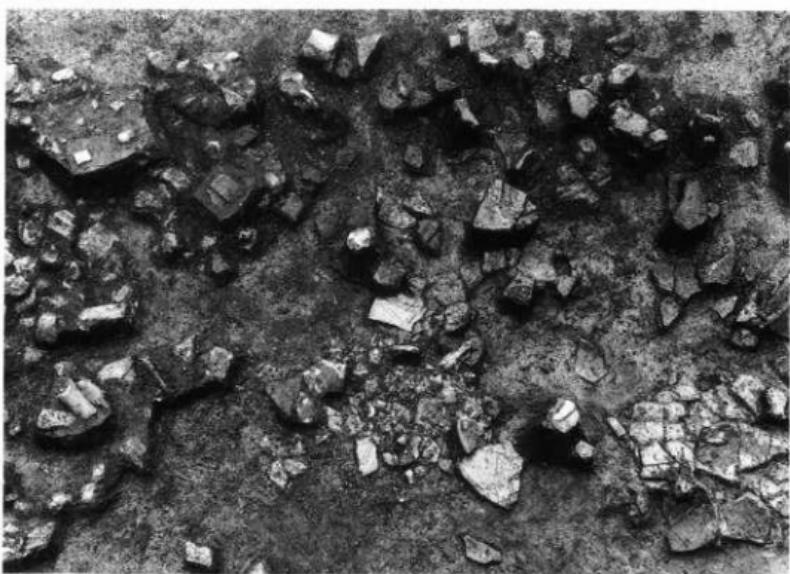
北壁断面 (C断面, C-C')



「レール状遺構」につぶされた埴輪の検出状況



C地区埴輪の検出状況



C地区蓋形埴輪等検出状況



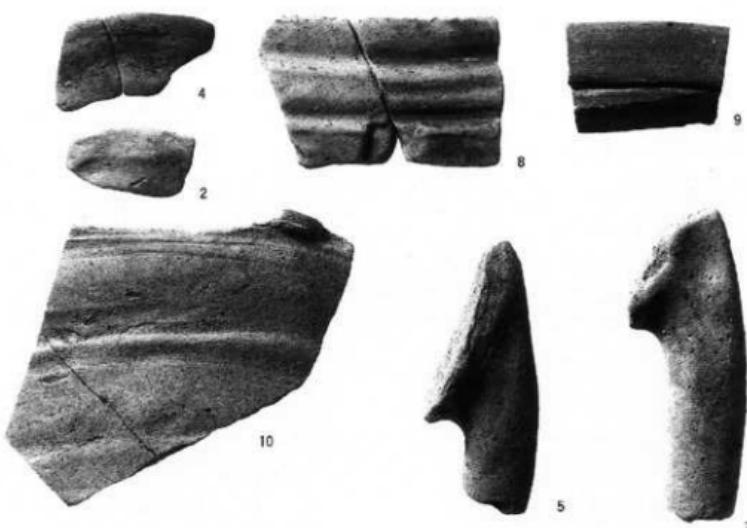
B地区石見型埴輪・蓋形埴輪・人物埴輪「ミズラ」等出土状況



B地区大刀形埴輪出土状况



B地区家形埴輪・須恵器等出土状况

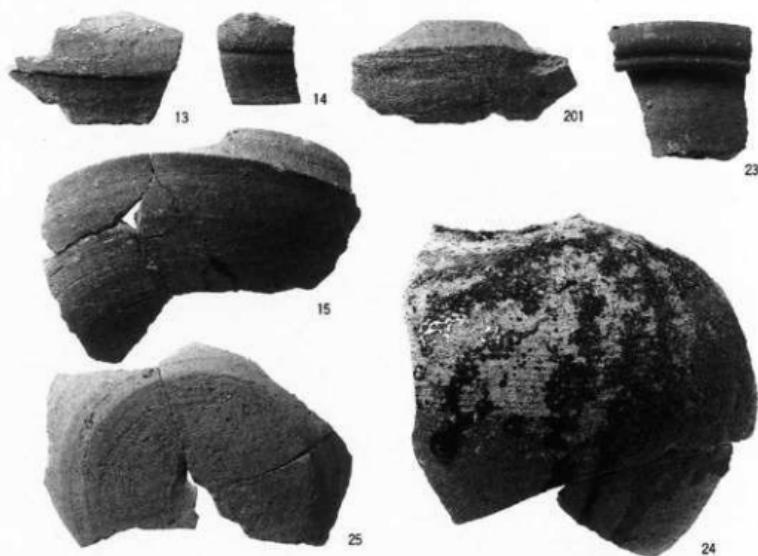


土師質土器・瓦質土器・須恵器・陶器類

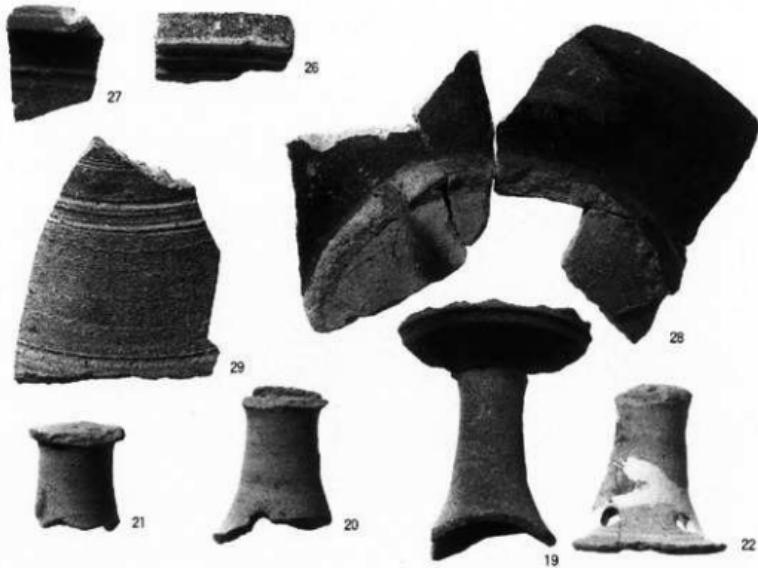


石器

須恵器大鉢



須恵器



須恵器



48

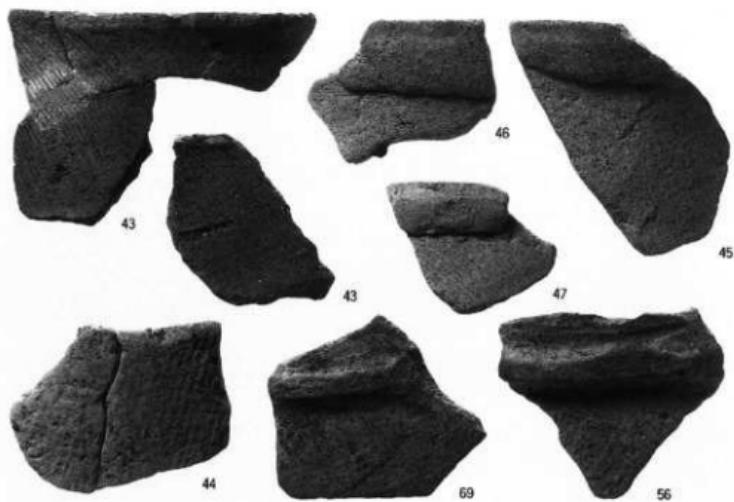


42

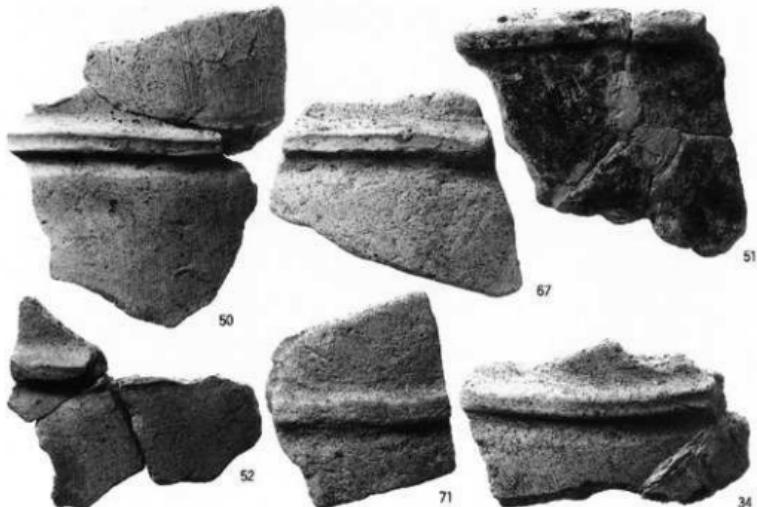


35

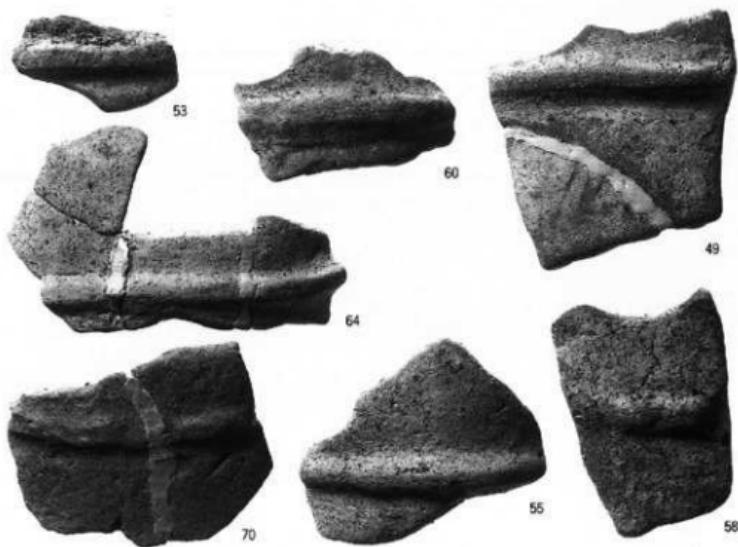
円筒埴輪（上・左下 土師質，右下 須恵質）



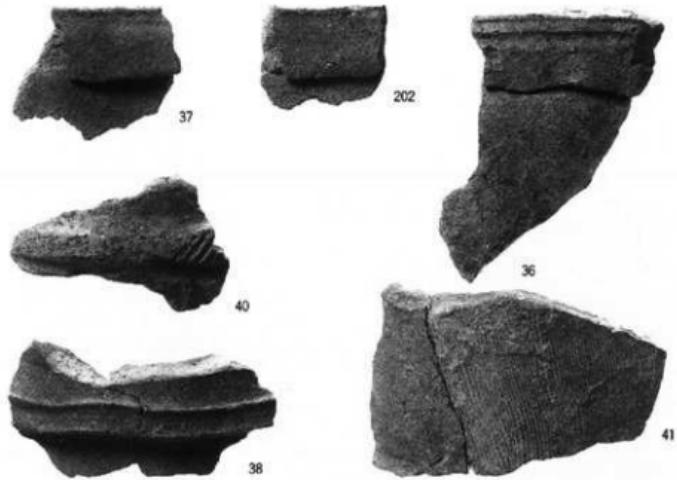
円筒埴輪（土師質）



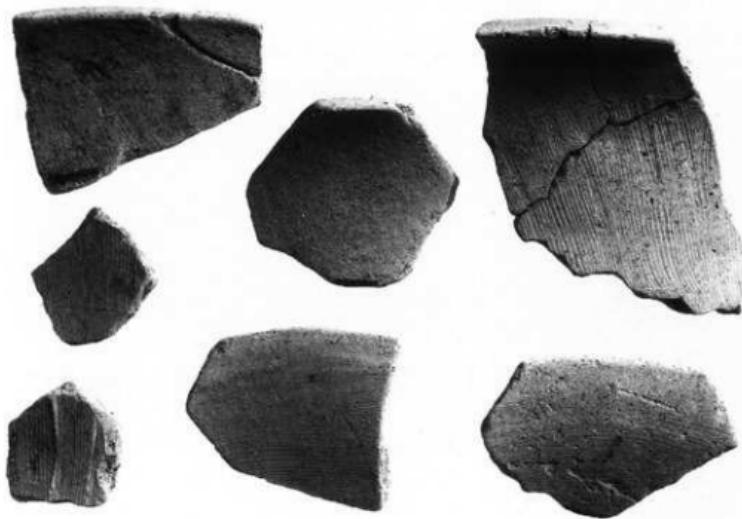
円筒埴輪（土師質）



円筒埴輪（土師質）



円筒埴輪（須恵質）



朝顏形埴輪 (31)



朝顏形埴輪 (33)



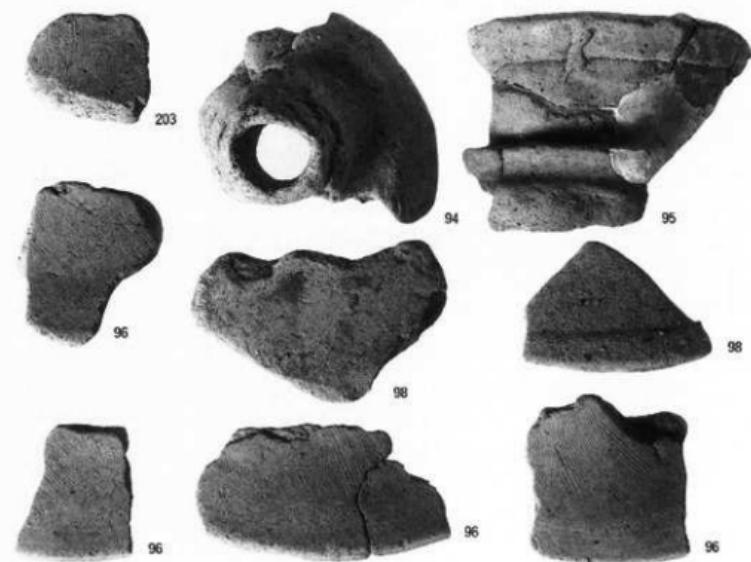
朝顔形埴輪（34）



蓋形埴輪（立縛り）



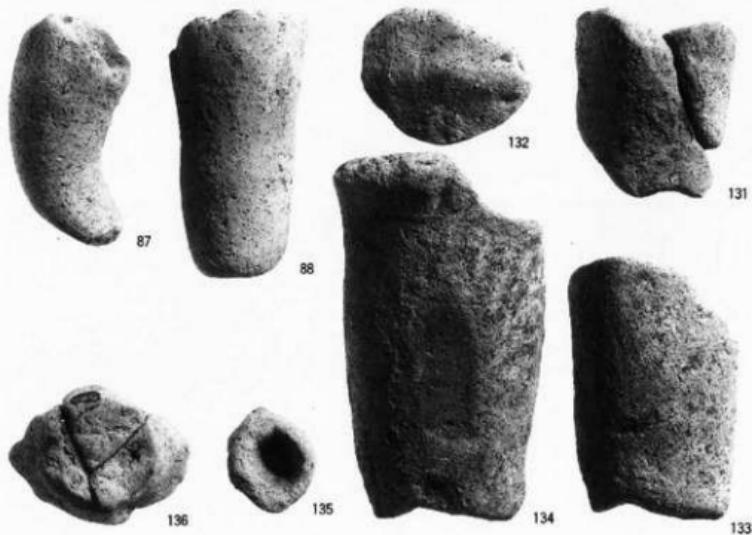
94の上面



蓋形埴輪



人物埴輪（須恵質）



人物埴輪（土師質）・その他の形象埴輪

正面



側面



背面

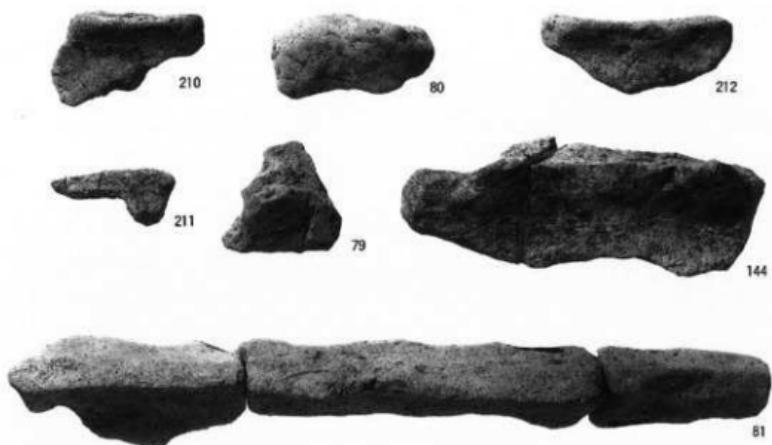




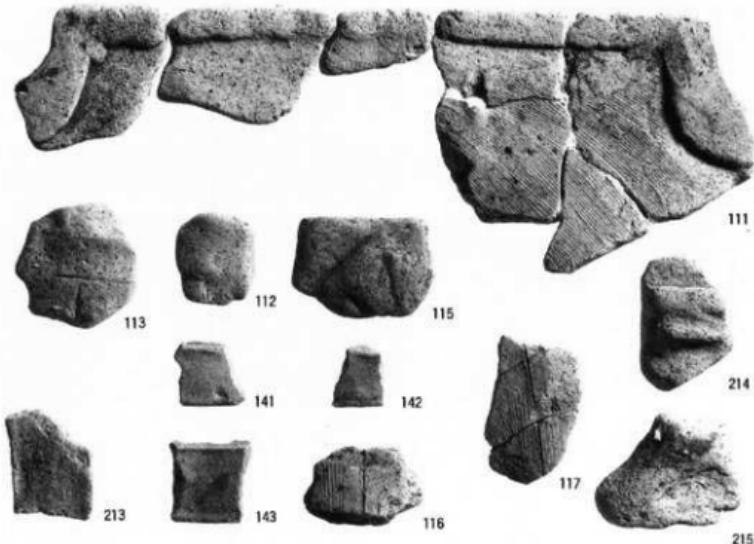
家形埴輪（土師質）



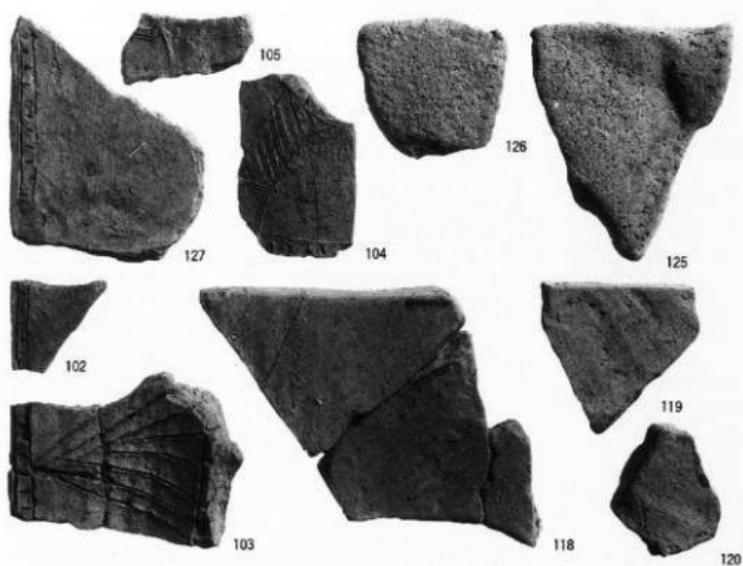
家形埴輪（須恵質）



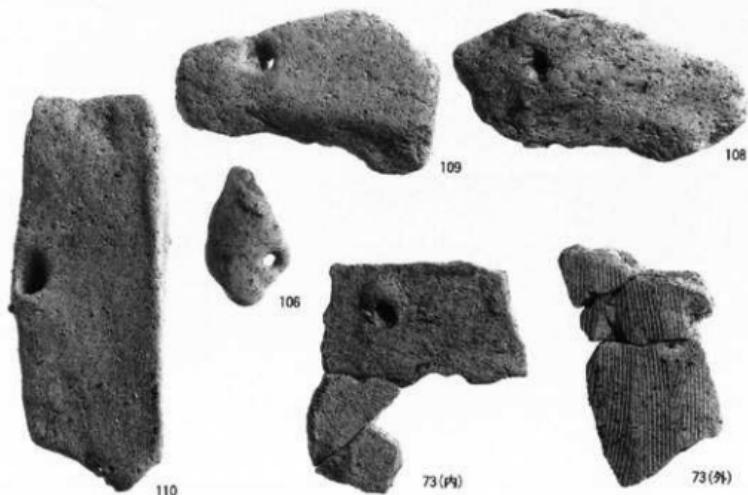
家形埴輪（土師質）・その他の形象埴輪



盾形埴輪・その他の形象埴輪



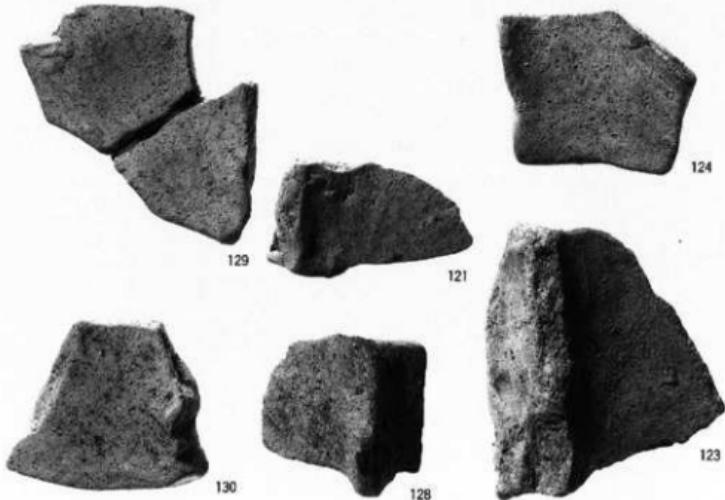
盾形埴輪・石見型埴輪



穿孔のある埴輪



鋸つき埴輪 (110)



鋸つき埴輪

豊中市 新免古墳群第3号墳
—新免遺跡第38次調査—

1993年6月30日発行

編著者 浅岡俊夫

発行 六甲山麓遺跡調査会

〒662 西宮市田中町4-23-401

TEL (0798)22-3627

印刷 真陽社

〒600 京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL (075)351-6034

豊中市 新免古墳群第3号墳 一新免遺跡第38次調査

六甲山麓遺跡調査会

1993年6月

付図

新免古墳群第3号墳（新免遺跡第38次調査）空洞平面図

付図 新免古墳群第3号墳（新免遺跡第38次調査）空測平面図

